
つき なし よる
無月夜に逢いましょう



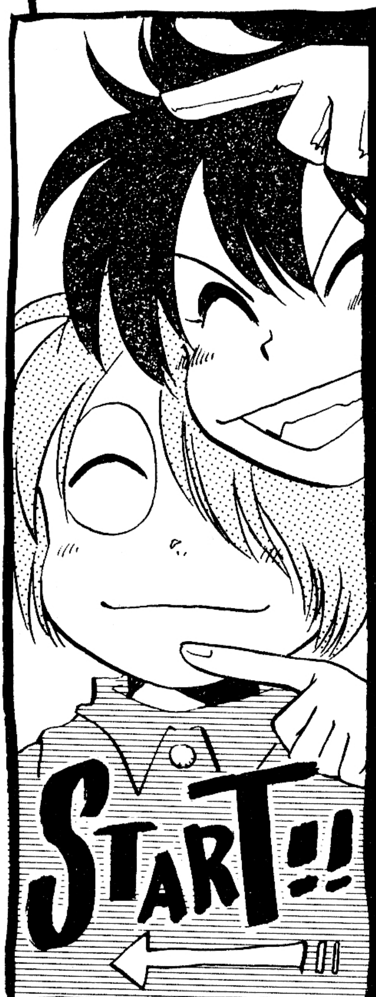
無月夜（つきなしよる）にあいましょう



【無月夜】朔の夜。新月の夜。まっくらな本当の夜。

まえがき

こんばんわ。八尺行です。今回は小説メインの本！です!!
思い起こせば1回目の配本"逢魔ヶ時に逢いましょう"が出る
よりも前に読ませてもらったかもの、もとい こまきちゃんのお話が
始まりとなり、今回このような形になりました。えん魔くん＆
地獄童子の出演もアリという豪華さ!! 念願の挿し絵を入れ
させてもらって、激ハッピー!!です♥ 皆さんもお楽しみ下さい♥



もくじ

長い石段を駆け上がった先には、神社があった。鬼太郎は熱い息の塊を吐き出しながら膝に手をついた。夜とは言ってもそこには、夏の空気がむっと渦巻いている。

「出てきてくれ、話が聞きたい」

段の先に続くのは、古い石畳。そのすぐ横は土がむき出しになっていて、雑草が生えている。

古い信仰のにおいのする神社だった。

しかしその神社が建つ丘は、時代の侵食を受け、住宅地に切り崩されつつある。

「停電事件のことを聞きたいんだ」

鬼太郎は油断無く左右のしげみに髪の毛のアンテナを向け、闇に目をこらした。大きな銀杏の木が、夜風に激しく揺れ、辺りの気配をかき乱す。

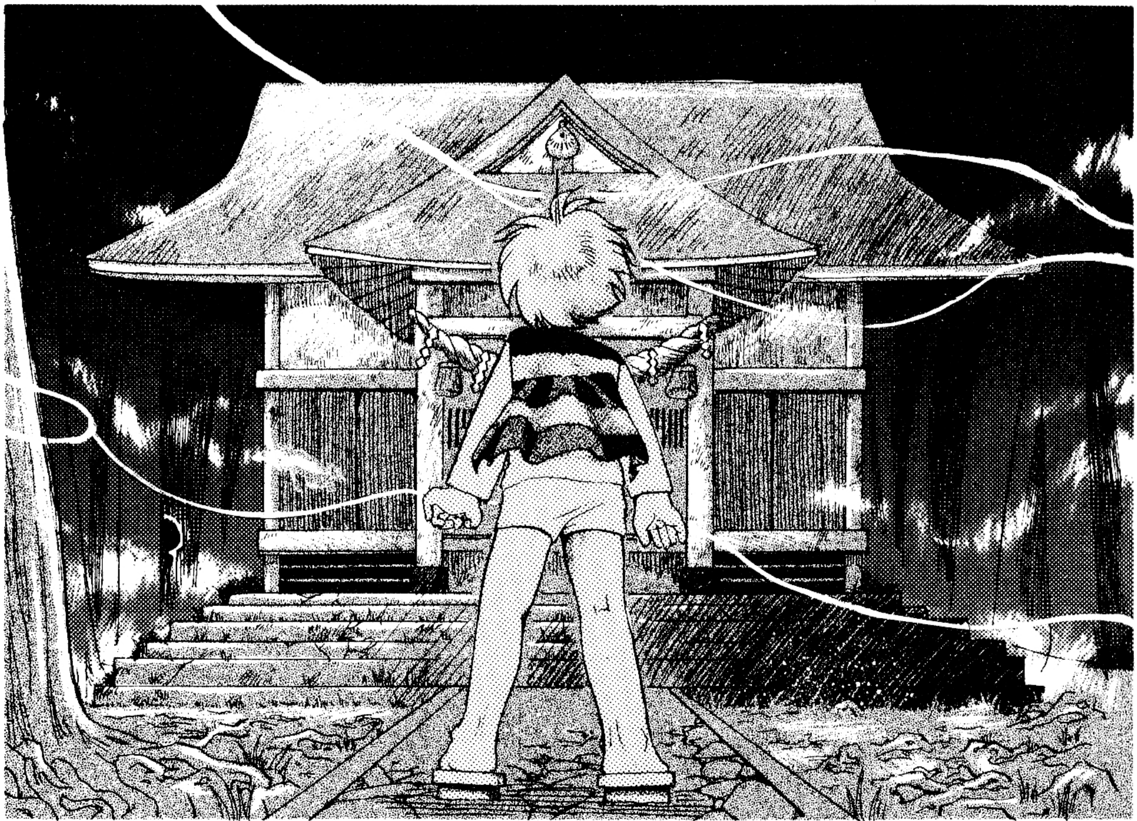
やわらかな緑の葉をつけたヤマブキの木。その暗がりに小さな人の形をしたものが感じられた。

「ぼくは鬼太郎。話し合いたい」

鬼太郎は、足元に落ちているかすかな金粉に気付いた。さっき、えん魔くんが追って行った鳥。あの鳥の羽は金粉を帯びていた。

「鳥を操っているのは、君だね」

鬼太郎はゆっくりと、ヤマブキのしげみに近寄った。石段と下駄の擦れる音が、少し湿り気を帯びて辺りに響く。

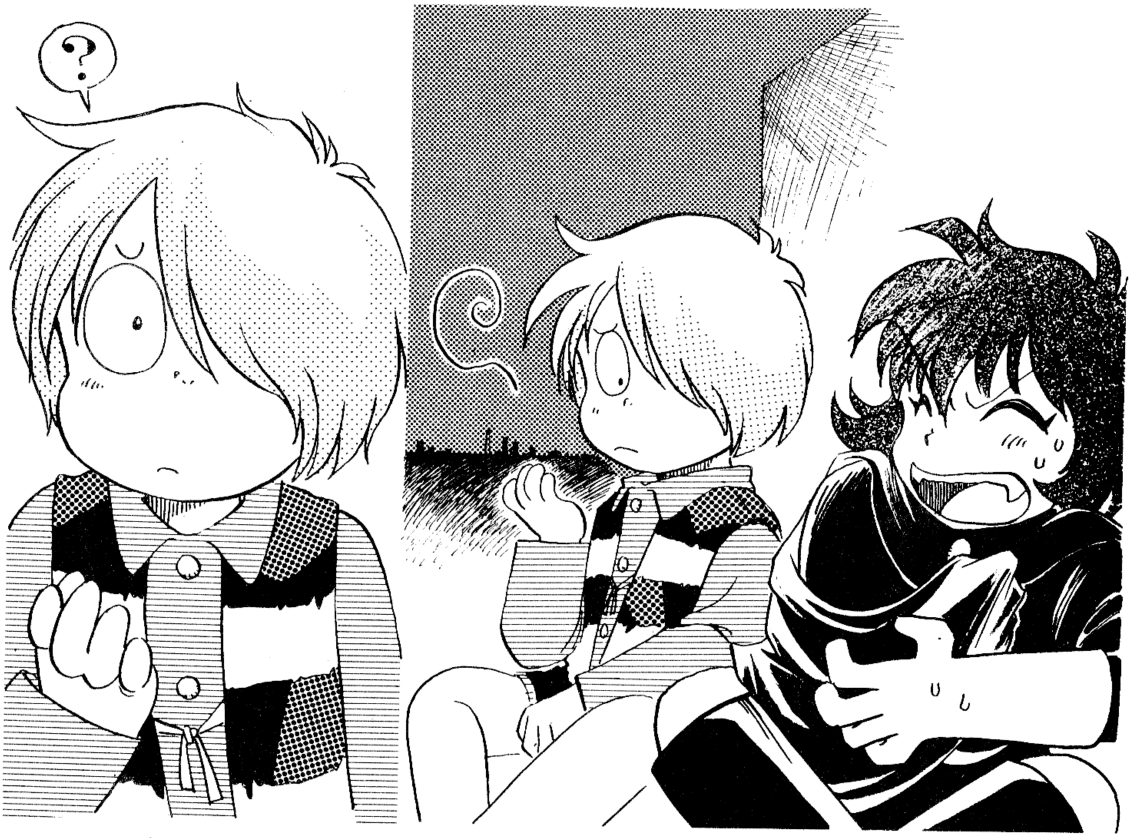


「近づくな」
低い声だった。
「解った。それなら、そっちから出てきてくれないか」
鬼太郎は、戦う意志が無いことを示すように両手を上げた。
「帰れっ」
ヤマブキの枝が激しく動き、子どもの背丈ほどしかない影のような妖怪の姿が一瞬だけ見えた。
「帰れっ。おら達にかかわるなっ」
鬼太郎の首筋を汗が伝う。びりびりとした相手の感情が、こちらまで響いてくるようだ。
鬼太郎は、辛抱強く話しかけた。
「もう、やめよう」
影はしげみからこちらを伺い、獣のような唸り声をあげている。
「こんなことをしたって、何にもならない。そうだろ」
鬼太郎は、正面から吹き付けてくる夜風を体いっぱいに受け止めて言った。

奇妙な停電事件が起こったのは、二日前の夜のことである。突然電灯だけがつかなくなった。冷蔵庫、クーラー、その他光を発しない電気機器は正常に動いているのに、電灯だけがどうしても点かないのだ。あれほど明るかった人間の街は静まり返り、穴でもあいたように真っ暗になってしまった。
一度停電に見舞われると、ろうそくのような電気によらない明かり以外は使えなくなる。
停電が最初に起こったのは、今鬼太郎がいるこの地方都市で、そこから線路沿いにある主要な町へ、毎晩のように奇妙な停電は広がって行った。次にこの怪現象が起こりそうな場所は、容易に推測できたが、人間達にはそれを防ぐ手立てがない。
夜間の交通は規制され、人間の生活には大きな支障が出始めていた。

「鬼太郎、人間は今まで、いろんなもんを燃やしてきた。川も大地も、みんなだ」
えん魔くんは、ただの黒い塊と化したビルの屋上で鬼太郎に言った。
見渡す限り、この街は暗闇だ。
人間が必死に灯してきた電灯も、その全てが消されたことになる。
二人は、屋上に張り巡らされたフェンスの外側に腰掛けて、冷たくさえ感じる夏の夜風を浴びていた。この街に、こんなにしっかりとした夜が訪れたのは何年ぶりのことだろう。
「電灯ってのは、妖怪除けの結界みたいなもんだよな」
えん魔くんが呟く。
「あれが夜を照らすようになってから、妖怪は街の中へ入ることができなくなった」
妖怪からしてみれば、その輝きは人の支配の証であり、独占の象徴だ。

えん魔くんは、鬼太郎の方を見ないよう、わざとらしく夜空を仰いだ。
二日前の夜、えん魔くんは異様な鳥の姿を目撃している。それが今回の停電の原因であろうことに気付いた上で、彼は鳥を見失ってしまった。普段のえん魔くんならば、ありえないミスだ。
「静か、だな」
一台の車も走ってはいない。大量の光を吐き出していた巨大広告は、ただの分厚い板になってしまった。
それで良いのではないか、とえん魔くんは思う。鬼太郎だってきっと、同じ事を感じているはずだ、と。
「なあ、鬼太郎」
えん魔くんの声は、すこし掠れていた。
「事件の張本人、見つけたら、どうする?」
「説得する」
えん魔くんは体を起こすと、鬼太郎の顔を無遠慮に覗き込んだ。
「おまえ、何て言うつもりだよ。『やめろ』って言うのか?」
「うん」
鬼太郎の言葉には、なんのためらいもない。
「本当にそう言えるのか?鬼太郎、おまえだって」
「えん魔くん」
鬼太郎は、いつもののんびりとした声で答えた。
「人間はもう、電灯がなきゃ生きていけないんだよ」
鬼太郎の髪が、夜風に揺れている。
都会の眠れぬ鳥達は、電灯が消えた今も、駅前のわずかな街路樹をめぐって飛び回っていた。
それを見つめる鬼太郎の横で、えん魔くんも黙り込む。
えん魔くんは以前、鬼太郎にこんな事を言われた。『流れて行く時を、怖いと感じたことがある』と。えん魔くんは、鬼太郎の愚痴らしい愚痴を聞いたことがない。けれどそんな事を言った鬼太郎が、やけに寂しく見えたのをえん魔くんは覚えている。そして、今の鬼太郎も同じ顔をしている。
えん魔くんは、俯いたままの鬼太郎にそっと声をかけた。
「悪かったな」
電灯がなければ、人間は生きていけない。えん魔くんだって解っていたのだ。わざわざそんな事を確認するために、鬼太郎に辛い質問をしてしまった。
「鬼太郎…」
「…どうしよう」
顔を上げた鬼太郎は、いつになく真剣な表情をしていた。
「いや、俺が悪かったんだ。お前が迷うことは無い」
「じゃあ…」
「は?」
えん魔くんは、ほとんど反射的に、伸びてきた鬼太郎の手を避けた。
「ちょっと待て、おまえそりゃ」
「トリノフン」

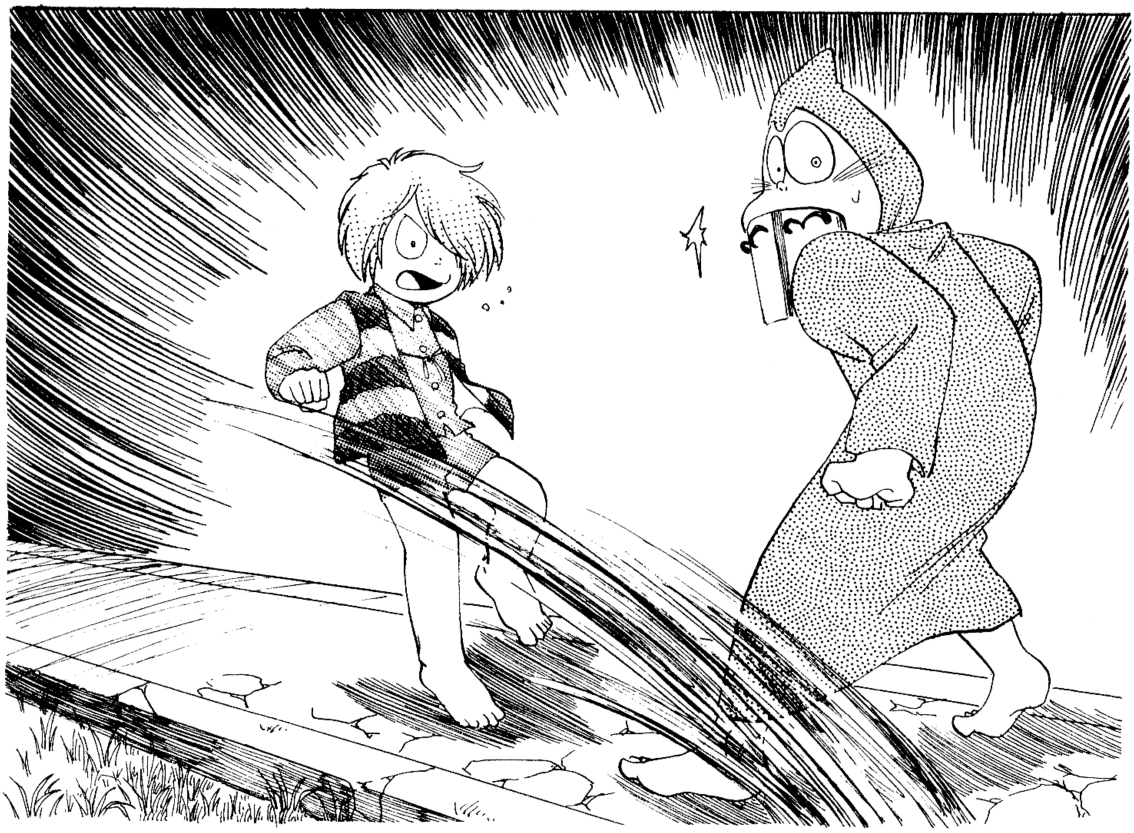


「は？」
唖然とするえん魔くんに、鬼太郎は淡々と語る。
「だから、鳥の糞だよ。そこに落ちてたの、手をついたときに触っちゃったみたいだ」
「って！何で俺のマントで拭くんだよ！」
「拭いていいって言っただろ？」
「言ってねえって！何でそうなるんだよ！だ、ダメだぞっ。大事なマントなんだかんなっ。あーもー、その辺になすっとけ、そのうち乾く。」
「だって。あ」
「今度は何だよ！」
「これ、木の実かなあ」
「一々中身まで見てんじゃねえ！」
鬼太郎は、心底情けない顔をしている。
眠たげな口、とぼけた鼻、素直な目。
えん魔くんは、とうとう堪えきれずに吹きだした。鬼太郎には敵わない。
「笑うことないじゃないか」
「べ、別に、笑ってるわけじゃ、ね、ねえよ」
どうして今回の事件に限って、鬼太郎の顔が見たくなったのか。
えん魔くんは目に涙を貯めて、大笑いしながら考えた。
「やっぱ、おまえと組んでよかったぜ」
「え？何？」

手を拭くことに熱中していた鬼太郎には、聞こえなかったらしい。
「何でもねえよ」
えん魔くんはうれしそうに、夜空を見上げた。
「鬼太郎、俺は金色の粉を振りまいて飛ぶ鳥を見てる」
「鳥？」
「ああ。そいつが十中八九、この事件の原因だ。だが、どうもそいつが一匹でやったとは思えねえ。後で操ってる奴がいると見て間違いない」
立ち上がったえん魔くんは、長い眉毛を指先ではじいた。勘で言っている訳ではない。妖怪の気配を察知するその眉毛が、わずかな手がかりを感じ取っていた。
「この辺り一帯を探しても怪しい奴がいないってことは、今晩はもっと別の場所を襲うのかもしれねぇな。鬼太郎、最初に停電が起きた街ってのに、行ってみないか」
初めて事件が起こった場所に、根城がある可能性は高い。
「何だよ」
えん魔くんは、怪訝そうにこちらを見ている鬼太郎に気がついた。
「いや、べつに」
いつものえん魔くんならば、『行ってみないか』などとは言わない。『行くぞ！』『行くっつってんだろ！』『もたもたしてんじゃねえコノヤロウ！』とまあ、これくらいは言う。
えん魔くんは鬼太郎の、どこまでも丸い瞳に耐え切れず苦しい咳払いをした。鬼太郎の前では、少なからず落ち込んでいた自分を認めざるを得ないらしい。
「まあ…」
ばつの悪い顔をして、
「このえん魔さまにまかせときな！」
胸を張って見せる。
えん魔くんが笑うと、鬼太郎はカランと下駄の良い音をさせて立ち上がった。
静かな夜。
鬼太郎は、暗い街をゆっくりと見渡した。
もう一度、この夜を確かめるように。

しげみの中の小さな妖怪は、迷っていた。敵だと思っていた鬼太郎は、一向に攻撃してこない。しかしだからと言って、警戒心が消えるわけでもなかった。鬼太郎から感じられる人間の臭いが、彼の心を逆撫でていた。
「出てきてくれ」
鬼太郎はもう一度言った。
「出ていっだらどうするつもりだ。おらを殺すのが。人間に頼まれだのが」
「顔も見ないで、話ができるかい？」
鬼太郎は、しげみの方へ手を伸ばした。
妖怪の気配が、迷うように揺れる。

その時だった。
石段を、背の高い男が駆け上がってくる。
「ようよう！おめえの悪事はお見通しなんだよっ」
完全に息が切れて、今にも転びそうなこの男は…。
「ねずみ男」
鬼太郎が声を上げた。
「悪党めっ。ついに見つけたぜ。今こっぱみじんにやっつけてやっからな。観念しやがれ。行け！鬼太郎！」
威勢はいいが、足元はふらふらである。
「ば、ばか」
慌ててねずみ男の口に下駄を突っ込んだが、遅かった。
「やっぱり、おらを殺す気ぃだな」
静まりかけていた妖怪の怒りが、一気に噴き出す。
「違う」
鬼太郎が、声の方向に駆け寄ろうとした瞬間、小さな影はしげみから飛び出し、恐ろしい速さで二人の横を駆け抜け、段を転がり降りて暗い街に消えてしまった。
「追いかけるぞ」
鬼太郎はねずみ男の口から下駄を奪い取り、軽くジャンプしてそれを履いた。
「そんなあ、せっかく登ってきたってのに」
ねずみ男がぼやく間に、鬼太郎はもう石段を下りて、角を曲がろうとしている。



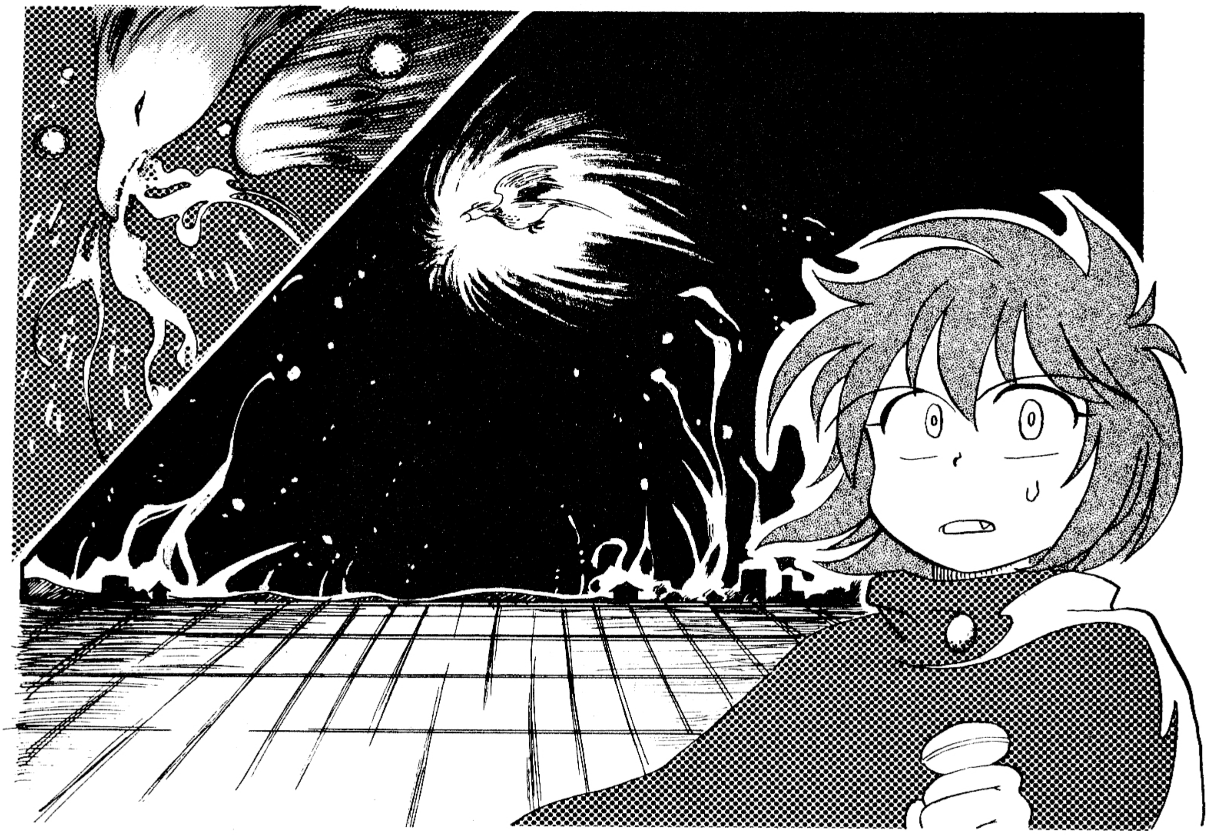
「ま、待ってくれよ。今回の事件はちゃんと解決してくれね～と困るんだよっ」
ねずみ男の頭にちらついているのは、電力会社からせしめるつもりの謝礼金だ。
「鬼太郎ちゃあん」
ねずみ男は着物のすそをたくし上げると、よろよろと階段を降りはじめた。

堀に囲まれた家々には、ろうそくの明かりらしい小さな灯が見えるだけ。
(えん魔くん。人間はもう、電灯がなきゃ生きていけないんだよ)
鬼太郎にとってそれは、自分に言い聞かせた言葉だった。
住宅街の一角、空き地に妖怪を追い込んだ鬼太郎は、それでも逃げようとする小さな影に対して、躊躇することなくオカリナの鞭を使った。鞭に脚をとられた影が罠にかかった小動物のようにもがく。
「なんだ、これっ」
暴れるほどに絡まってくる鞭は、噛み切ろうとしても無駄だった。
「鬼太郎、やったのか」
追いついてきたねずみ男が喚く。
すると、一瞬の隙をついた小妖怪が、黒い陶器の破片のようなものを二人目掛けて飛ばしてきた。
鬼太郎はちゃんちゃんこを大きく振って、破片を全てはじき飛ばす。ねずみ男は飛び上がって、鬼太郎の後に隠れた。
「やめるんだっ。ケンカしに来たんじゃないんだよっ」
見ると、影は震えてうずくまっていた。
ねずみ男が恐る恐る顔を出す。
「なんだ、こいつ」
影の体は今にも消えそうに明滅していた。さっきの攻撃で妖力を使いすぎたのだ。
影がこれ以上攻撃できないと解ると、ねずみ男は影を見下ろした。
「けっ。脅かしやがって」
影を蹴りつけようとするねずみ男を、鬼太郎が止める。
「何でだよ。こんな騒ぎを起こした奴だぞ。うんとこらしめなきゃなんねーだろ」
鬼太郎は黙ってねずみ男を睨みつけると、消えてしまいそうな小妖怪にちゃんちゃんこを着せてやった。そうすると少しだけ、影の体は安定したようである。
「まぁた、お人好しが始まりやがった」
ねずみ男は肩をすくめると、ふて腐れた様子で後へさがった。こうなった鬼太郎には何を言っても無駄なことくらい、長い付き合いで解っている。
「暴れないで。きみが逃げないなら、その鞭ははずすから」
鬼太郎はそう言うと、跪いて絡まった鞭に手をかけた。
影がびくんと体を動かす。
「鳥を操っていたのは、きみだね」



鬼太郎の問いに、影は警戒しながらもぎこちなく頷いた。
「うでんを、飛ばしたのはおらだ」
鞭は簡単にはずれたが、小妖怪の脚には小さな擦り傷ができていた。
「痛むかい？」
影は、解らなくなってきた。鬼太郎の考えていることがまるで解らない。鬼太郎が、並みの妖怪ではないことくらい、影も理解していた。
なのにどうして鬼太郎は、こんな間抜けなことを言うのだろう。退治しにきたくせに、こんな擦り傷の心配をしている。
「おめ、頭わるいんか」
「そうかもね」
「そうそう、こいつ、腕は立つんだけどよ、まったく…」
ねずみ男が顔をしかめても、鬼太郎は笑っていた。
影には、そんなふうに笑える鬼太郎が羨ましかった。
「おらあ、ずっと一人だった。ずっと、神社に住んでたんだ」
影は恨めしそうに、鬼太郎と、その後からこちらを見下ろしているねずみ男を睨みつけると、急にそんな事を言い出した。
「あそこは暗ぐで、おら、すごく気に入ってだ。だのに、人間がどんどん明りを灯すんだ。おめえみでえに強ぐで、仲間もいるやづにはわがらねえだろうけど。おらあ、名前もねえちっぽけな妖怪だ。おらみだいな妖怪は、人間の灯りでだって簡単に消えちまう」
実際、名も無い小妖怪は沢山いた。そんな妖怪たちがいる事、そ

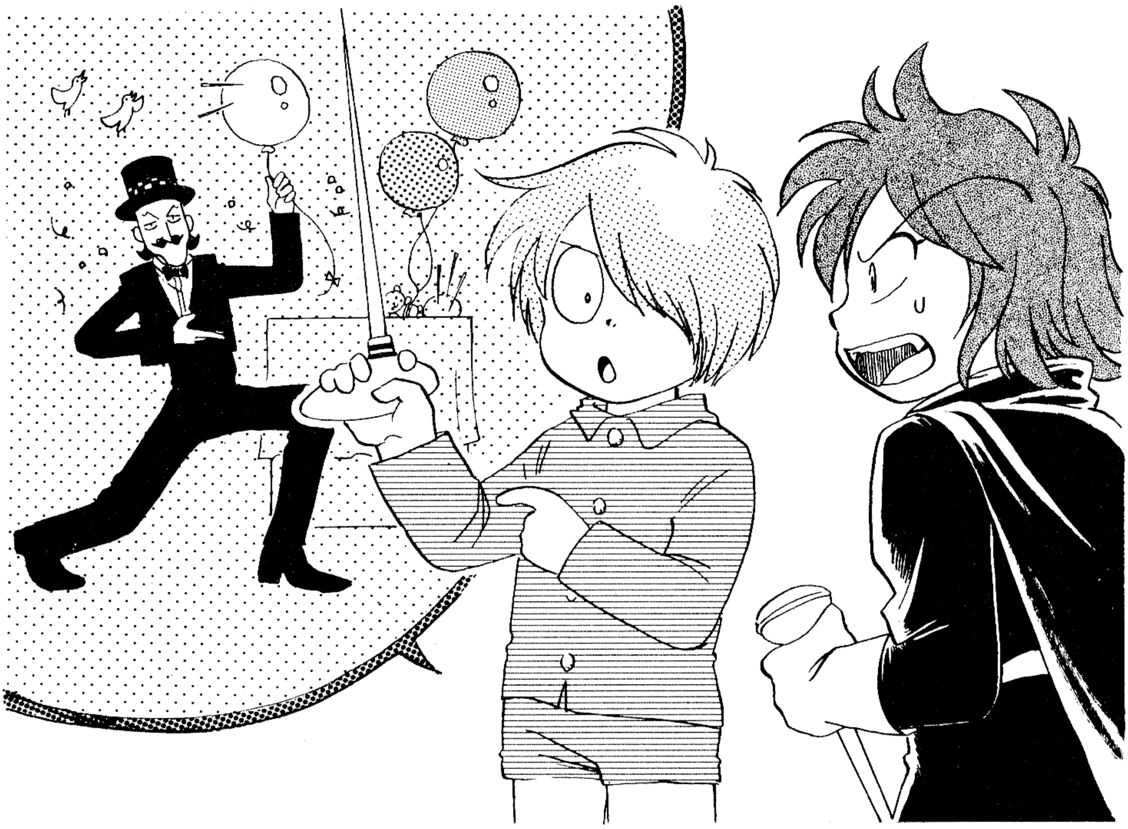
して、そんな妖怪たちこそが今、最も苦しんでいることを鬼太郎は知っている。
「おら、昔みてえな真っ暗な夜が欲しがったんだ。人間が勝手するんなら、おらだって」
「だから、停電を起こさせたのか」
鬼太郎は呟いた。怒りとか、哀れみとか、そんな感情からではない。
「おらあ、そうするしがねえもん」
影は言った。
「おらを退治に来たんなら、おら、悪ぐねえぞ。おらにとっては生きるが死ぬがなんだっ」
鬼太郎に向けられた、小妖怪の目は暗かった。
鬼太郎はそれを見て、深くため息をつく。悪いか、悪くないか。強いか、弱いか。皆、そんなことばかりを言う。それで全てが決められていく。
「でも、灯を消して、それできみは幸せになれた？」
「え？」
影は顔を歪ませた。そんなことを言われるのは初めてだったし、ただ、必死にここまでやってきた。
「ぼくは、そうは思わない」
鬼太郎の顔は、どこか、寂しげだ。
「きみの敵は人間じゃない」
「人間が悪ぐねえってのか！」
「敵なんて、いないんだとぼくは思ってる」
影の胸が痛んだ。鬼太郎の目は、自分の心の中の全てを見抜いてしまう。
影は、一瞬鬼太郎の方に手を伸ばしかけたが、次の瞬間、突然頭を押さえてうずくまってしまった。頭の中に、人間の笑い声が響くような気がしたのだ。
人間は、住み着いた場所に強力な電灯を点す。そうすると、影のような小さな存在の入る隙間は無くなってしまう。影にとって人間とは、そういうものだった。影はずっと人間を憎んできた。憎しみで動いてきたのだ。なのに、この鬼太郎という妖怪はその憎しみを吸い取ってしまう。
影は、急に鬼太郎が恐ろしくなった。
鬼太郎と話していると、今までの影は崩れてしまう。
「おらは…」
影は鬼太郎の手を払い除け、大きく首を振った。
「おらあ、悪ぐねえ」
影の表情は醜く歪み、不気味な笑い声がその口から漏れた。
「誰もおらのごとは責められねえはずだっ。おらは人間に…。人間に…」
その時だった。
「いいかげんにしろよ」
突然、静かな怒りをたたえた声が影の声を遮った。
「えん魔くん」



鬼太郎が、驚いて立ち上がる。鳥を追っていたはずのえん魔くんが、彼らの前に降り立ったのだ。
「自分が生きるためなら、何だってするのか？それじゃあ何にもならねえ。おまえだって長い間、人間のやり口を見てきたんだろ？なら、どうして解らねえんだ」
青白い、炎を思わせる口調だった。
「何を解れって言うんだよ」
影が、えん魔くんから目をそらす。それでもえん魔くんは、厳しい表情で影を見据えた。
「おまえの飛ばした鳥。どうなったと思う」
「うでん…。うでんか？おめえ、うでんに何がしたのか」
鳥。その言葉に影は震えた。
「羽天、っていうのか。あいつはもう限界だ」
えん魔くんが追って行った先にあったのは、人家のまばらな田園だった。
何故、街ではなくそのような場所に行くのか。えん魔くんは、二日前に見たときより、鳥が異常に巨大化しているのを気にしていた。
鳥がゆっくりと羽ばたく。
えん魔くんは息を飲んだ。
突然、家々の灯りが液体のようになって夜空に浮かび上がり始めたのだ。そしてその光の玉は、巨大な鳥のくちばしに飲み込まれていく。
妖気が、ただならぬ気配を帯びてえん魔くんの眉毛を震わせた。

光を飲むたびに、鳥の体が発光する。鳥はそうして、何倍にも膨れ上がっていく。
えん魔くんはその光景を目の当たりにし、踵を返した。
「あいつ、喰った光を体の器官に溜め込んでやがるな」
影は、えん魔くんの言葉に小さく頷いた。
「どういうことなんだ、えん魔くん」
えん魔くんは、鬼太郎に頷いた。
「エネルギーの吸い込みすぎだ」
「すいこみ、すぎ？」
「ああ。そうとう無理してたんだな。自分が押さえられる以上に吸い込みやがって、体が膨張し始めた。ほっときゃ、爆発だ」
「爆発！」
鬼太郎は影を見た。影は目を伏せ、凍り付いたように立っている。
「誰のためだと思ってるんだ！」
えん魔くんは影の胸ぐらを掴んだ。
「あの鳥は、てめえの命をかけてでも灯を喰い続けてるんだぞ。これでもおまえは『自分のためだ、生きるためだ』って言ってられんのかよ！」
「そんなごと」
影の顔が、泣き出しそうになる。
「あんだにはわがらねえよ。おらはあんだらみてえに強ぐねえから」
「こいつ」
考えるより先に、えん魔くんは影の頬を殴っていた。
「えん魔くん」
鬼太郎が止めに入る。えん魔くんは、地面に叩きつけられた影を睨んだ。
「おまえ、知ってたんだろ」
えん魔くんの声は、怒りに震えている。
「鳥の様子がおかしいことくらい、傍にいれば解るだろ。こうなることだって予想できたはずだ」
「そんな、おらは」
影は頬を押さえたまま、えん魔くんの顔を見上げている。
影の目が揺れた。
「おまえ、だから今日はあいつを、あんな村に飛ばしたんだな」
「大きな街に飛ばすには、羽天の能力が不安になった。だから」
「やめでぐれっ」
影は、丸い目を大きく見開いて叫んだ。確かにそうだった。羽天がもう限界だったことを、影は気付けたはずだ。気付いていた。
影の目に、羽天の姿が浮かんだ。
人間の灯を食ってやろう。そう言った時、首をかしげていた羽天。訓練のために、何度も街灯の下をくぐった。頭を撫でてやると、コウと甘えた声を出して体をすり寄せてきた。
いっしょに眠ったお堂の隅。古い御輿が置いてあったあの暗がり。御輿に向かって手をかざす。そこに一羽の鳥がいた。自分の手に乗ったその鳥に、影は名前をつけたのだ。
（うてん。）

そう、羽天、と。
あの時、影は何を願ったのだろう。
「うでん」
影は呟いた。
停電を起こさせるという考えは、予想以上にうまくいった。しかし羽天の羽は毎夜抜け落ち、激しく電光を散らしていた。もう、近寄って頭を撫でてやることもできなくなっていた。
突然、今までとは全く違う種類の恐怖が影の中に込み上げた。
羽天がいなくなる。
影はどうしたら良いかが解らなくなった。胸が苦しい。影は、助けを求めるように鬼太郎を見、そして思わず叫んでいた。
「だって、怖がったんだあ。自分がだんだん消えちまうんだ、おらあ、怖がった」
「鬼太郎」
えん魔くんは、鬼太郎にすがりつく影を見てため息をついた。
「あの鳥はもうだめだ」
「そんな…」
「爆発すれば周囲に被害が出る。どこか、人気のないところに誘い出して、俺が遠くから爆発させる。それしかねぇな」
「でも」
「ああ、間違いなく、鳥は死ぬ」
影が、狂ったように叫ぶ。
「助けてぐれっ。うでんを、うでんを」
「だめだ。助けようにも、奴に近づくことさえ…」
無表情に言い放つえん魔くんに、影は今にも消えてしまいそうなその体から、大粒の涙をこぼした。空き地には、小妖怪のしゃくりあげる声だけが響く。
「鬼太郎おお。なんとかならねえのかよ」
たまらなくなって、ねずみ男が口を開いた。
「こんな俺でもよう。こいつの気持ちくらい解るぜ。こいつ、その、羽天ってのがいなくなっちまったら、一人ぼっちなんだろ。鬼太郎、なんとかしてやってくれ。頼む。頼むから」
鼻を擦った着物のすそに、鼻水の糸がぶら下がる。ねずみ男は、自分が影を退治しようとしていたことなどすっかり忘れて、ただもう鬼太郎を揺さぶった。
「なあ、なんとかできるんだろ、なあ」
「う〜ん」
鬼太郎は、爆発と聞いた瞬間から考えていた。自分に何ができるのか。残された希望は、何なのか。
まだ、できることはあるはずだ。
鬼太郎は、腕を組んで考えた。目玉のオヤジが考え事をするとき、よくそんなふうに腕を組む。
「そうだっ」
鬼太郎は、突然ぱっと顔を上げた。
「これを使えば、なんとかなるかもしれないっ」
鬼太郎が取り出したのは、オカリナだった。

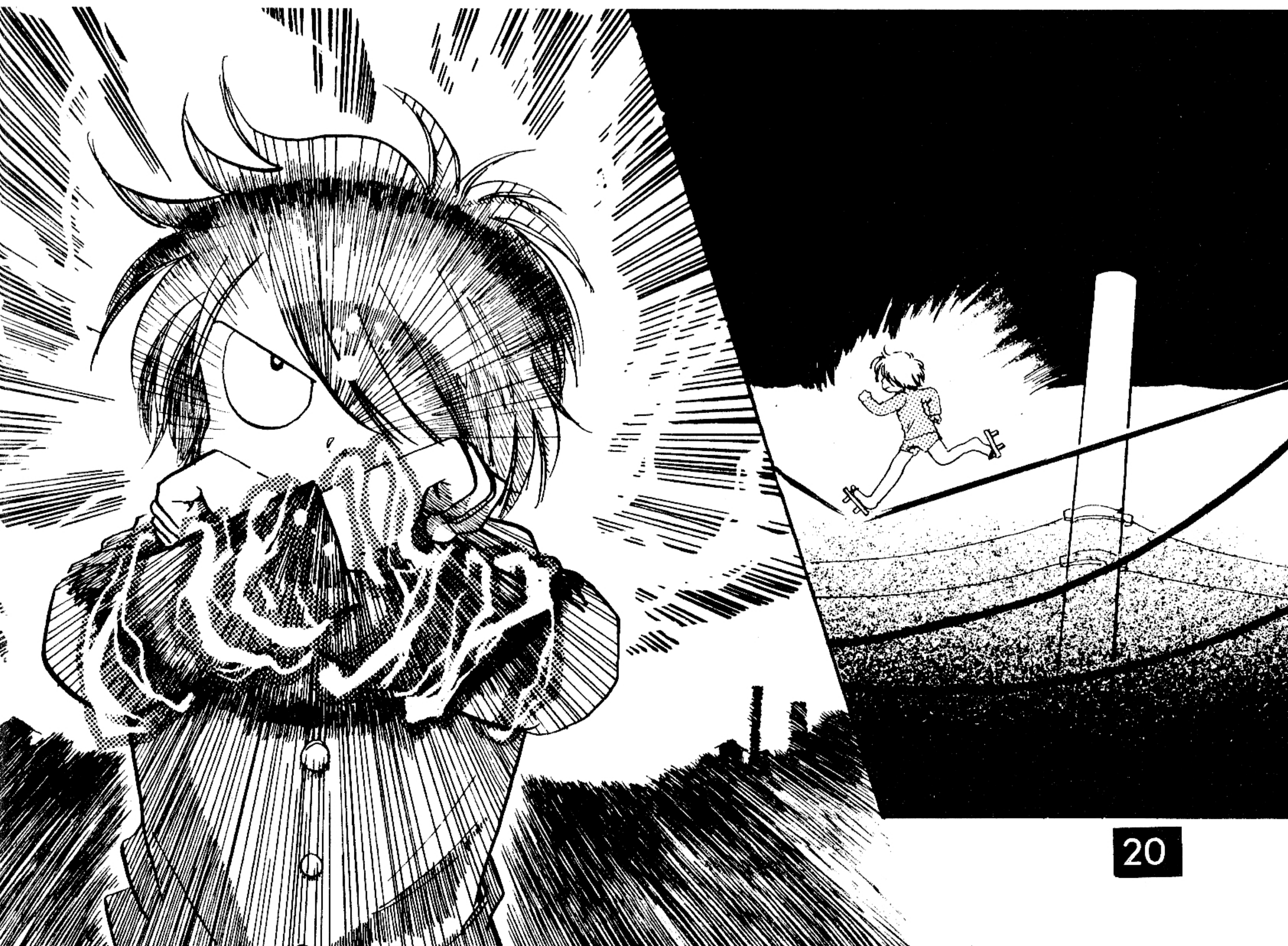


「どうするんだ、そんなモンで」
ねずみ男が首をかしげる。
「ちょっとうでんには痛いだろうけど、うでんにこれを突き刺して、その溜まったエネルギーってのを抜き取るのはどお？」
「は？」
何を言い出すかと思えば、とんでもない話だ。えん魔くんは危うく転びかけた。
「ば、バカかてめえは！そんなもん刺したら、爆発でおまえも助からねーぞ」
「大丈夫」
鬼太郎は、オカリナの吹き口を剣に変えた。
「前に、テレビで見たんだ。手品でさ、風船に針を突き刺しても割れないってやつ。今のうでんって、ぱんぱんの風船みたいなもんなんだろ。オカリナ剣をうんと細くして、一気に刺せば、きっと爆発せずに突き刺せるよ。それにオカリナ剣だったら、吹き口からずっと穴が通ってる。その穴からエネルギーをゆっくり抜いていくんだ」
鬼太郎は、自分の考えを信じきった表情で目を輝かせている。
「あのなあ、そううまくいくわけねえだろ。風船とは訳が違うんだぜ。失敗すりゃあ、爆発だ」
「やってみなきゃ解らないよ」
「解った時には粉々になってんだろーが！」
えん魔くんは、額に手を当ててため息をついた。鬼太郎はこう見えて、結構強情なのだ。

「だいたい、剣が突き刺せたところで、エネルギーを抜き取るのは不可能だ。そんなもん、すぐにはね飛ばされちまう」
「じゃあ、ぼくが押さえるよ」
鬼太郎は、剣を両手で持ち、押さえる仕草をしている。
「おまえが支えられると思ってんのか」
「うん」
「簡単に言うなよ」
「大丈夫、きっと何とかなる」
「あのなあ」
えん魔くんは、鬼太郎の無邪気な顔を睨みつけた。
「きっと、助ける」
影は拝むように、鬼太郎に手を合わせている。
「馬鹿野郎」
えん魔くんは言った。
「えん魔くん？」
「馬鹿野郎って言ってんだよ！解ってんのか、鬼太郎。失敗すりゃあ、おめえが死んじまうんだぞっっ」
火を吹かんばかりの勢いに、鬼太郎は後方へ吹き飛ばされそうになる。
「えん魔くん…」
「俺は、反対だ」
「だけど」
鬼太郎は、言葉を探すように、少しの間を置いた。
「何とかしたいんだ。ぼくに出来ることなら、何とか」
心に、一番苦しい思いを抱えていたのは、鬼太郎だったのかもしれない。
鬼太郎は、もう一度強く頷くと、暗い道を駆け出した。
「ま、待てよ！おいっ」
呼び止める隙も無い。
「きっと戻ってくるからー。えん魔くんは待っててー」
鬼太郎の姿は、暗い塀の向こうに消えた。
「な…」
残されたえん魔くんは、言葉も出ない。
一瞬頭の中が真っ白になったようで、えん魔くんは引きとめようと伸ばした手さえそのままに、呆然と立ち尽くした。
「なんなんだ、あいつは…」
ぶつけ所の無い怒りが徐々に込み上げてくる。
「なんでだよっ」
えん魔くんは、体から真っ赤な炎を噴出して怒鳴っていた。
「どうしてあいつは、何が出来ることで、何が出来ねえことなのかの区別もつかねえんだ」
えん魔くんの長い髪から汗が飛び散り、蒸発する。えん魔くんはねずみ男を睨みつけると、その足元に思い切りステッキを叩きつけた。
「ちくしょう！どいつもこいつも」
えん魔くんの体から、ひときわ大きな火の玉が空に昇る。

どうして鬼太郎はこんな状況で、大丈夫だと言えるのか。いったい何を信じれば、あんな表情ができるというのか。
えん魔くんの視界に、影の姿が入る。鬼太郎は影に、自分のちゃんちゃんこを着せたまま、走って行ってしまった。
「えん魔くん」
ねずみ男が、おどおどしながら声をかける。
「あの馬鹿野郎」
えん魔くんは呟いた。
「この俺様に、待ってろなんざぬかしやがった」
それがどれほど、失礼な言葉だったか。
「なあ」
「は、はいいっ」
怯えるねずみ男の足元から、ステッキを拾い上げる。
「あいつ、馬鹿は馬鹿でも筋金入りだ」
えん魔くんは、ふっと表情をゆるめた。
「この俺様を差し置いて、事件を解決しようなんざ百年早えんだよ」
「そ、それじゃあ」
「いいか、あいつの馬鹿に付き合う訳じゃねえ。俺は、俺自身の馬鹿さ加減にけりを着けて来るだけだ」
えん魔くんは、ねずみ男を見た。
「え、えと、あの〜」
何やらまずい雰囲気に、ねずみ男が後退りする。
「わわわ、ワタクシ、急に今すぐ急用がっ」
「まさか、ここまで来て逃げたりはしねえよなあ」
えん魔くんの瞳の中で、炎が怪しく揺らめいていた。
「おまえは一反や皆を呼んで来い。急げよ。ちょっとでも遅れたら、解るよなあ」
つまり、鼠の丸焼きがこんがりと出来上がる訳で。
「そんな」
ねずみ男は一瞬、かなり情けない顔をしたが、えん魔くんに対しては文句も言えず、持ち前の敏捷さで狭い路地に入り込んで行った。
えん魔くんは、影に向き直る。
「おまえはどうする」
影は、震えていた。
「おらあ、あがるいと消えちまう」
鬼太郎のちゃんちゃんこのおかげで、今は何とか形を保っている程度なのだ。
「じゃあ、好きにしな」
えん魔くんは、それ以上何も言わなかった。
風も無いのにマントが揺れる。えん魔くんの体が、ふわりと宙に浮いた。
振り返ることなく、えん魔くんは飛び去る。
空き地に残された影の体に、舞い上がった砂埃が降りかかった。

電柱の上で鬼太郎は、あちこちの方角に向かってにおいを嗅いでいた。大丈夫だとは言ったものの、もしもの事を考えれば、街の上で羽天に剣を突き立てるわけにもいかない。
鬼太郎は手をかざして暗い街を見渡すと、電線の上を駆け出した。リモコン下駄を履いているから、これくらいのことは簡単にできてしまう。
(羽天は光を吸い込む。誘い出すなら光だ)
鬼太郎は考えていた。しかし、この停電区域ではどんな電灯も使えない。
(人間の電灯はだめでも、ぼくの体を通して発光させる体内電気の光なら…)
鬼太郎は走りながら、両腕を顔の前に交差させ、構えた。
「体内…」
鬼太郎の両手に光が点る。
「電気!」
叫びとともに、鬼太郎の体は激しく発光した。
(電灯はつかなくても、電気は来ているんだったな)
自分の体に蓄えている電気だけでは足りない、鬼太郎は電線から直に電気を吸収して走った。
人家がまばらな地域とは言っても、電線はしっかりと張り巡らされている。しばらく走ったところで、鬼太郎は背後に強い妖気を感じた。すさまじい吸引力で、鬼太郎の発する光を、その体ごと吸い込もうとする。鬼太郎がいるのは、不安定な電線の上だ。鬼太郎は、



振り向かずに全力で走りつづけた。
前方に湖が見えてくる。
さっき鬼太郎は、水のにおいを探していたのだ。
「よし、こっちだ」
鬼太郎は、オカリナ剣を握り締めると、棒高跳びの要領で湖に向かって飛び出した。
「伸びろ」
意のままに長さの変わるオカリナ剣が、大きな弧を描いて鬼太郎の体を湖の中央へと運ぶ。
鬼太郎はそこで、一度オカリナ剣をもとの笛に戻すと空中で反転した。膨張した羽天の姿が、はじめて目に入る。
特徴的な長い尾、頭の羽飾りは間違いなく聞いていた通りの羽天の姿なのだが、巨大化は思った以上に進んでいた。
「もう一度、伸びろっ」
鬼太郎は、今度は下へ向けてオカリナ剣を伸ばした。湖の底に突き当たるほど長くである。
鬼太郎の体は持ち上げられ、背中すれすれで羽天のくちばしをかわした。
「今だっ」
鬼太郎は、瞬時にオカリナ剣をもとのサイズに戻して空中で回転すると、羽天の背中目掛けて落下した。しかし。
「わああっ」
発光をやめていたにもかかわらず、羽天はその大きさからは想像も出来ないスピードで、鬼太郎の体に突進してきた。危うくかわしたものの、バランスをくずした鬼太郎が羽天の背中を転げ落ちる。
鬼太郎は、なんとかその長い尾を掴んでぶらさがった。
「うでん、やめろっ。暴れるなっ」
「あっ」
羽天は苦し紛れに、必死で鬼太郎を振り落とそうとする。
ついに手を滑らせた。鬼太郎は、反射的に目を閉じた。
落ちる。
けれども、
「あれ?」
何時までたっても、落ちるという感覚がやってこない。
「みっともねーな。ばたばたすんなよ」
鬼太郎は目を開けた。黒いマントが翻る。
「えん魔くん!」
素っ頓狂な声を上げる鬼太郎の襟首を、えん魔くんが掴んでいる。
「ほらよっ」
羽天の背に降ろされて、鬼太郎は目を瞬かせた。
更にその手から、えん魔くんがオカリナ剣を奪い取る。
「ほら、おめーもこっち持て」
「え?でも、あの」
「俺がやっちゃあ悪ぃってのかよ」
「だって」
「おめーの馬鹿がうつっちまったんだよっ」

えん魔くんの怒った顔が、鬼太郎には嬉しかった。
「えん魔くん」
足元が、大きく揺らぐ。
感動している暇はない。
二人は、各々両手でオカリナ剣を握ると，羽天の背にしっかりと立った。どんなに羽天が暴れても、二人ならばなんとかバランスをとって立つことができる。
「鬼太郎、背中の中心だ」
炎を操るだけあって、えん魔くんには羽天のエネルギー貯蔵器官が見えている…らしい。当てずっぽうである可能性も高いが、鬼太郎は無言で頷いた。
「いくぞっ」
「せーのっ」
「やあぁっ！」
掛け声と共に、剣は羽天の背に突き刺さった。
時が止まったような静寂。
爆発は…していないらしい。
「鬼太郎、大丈夫か」
えん魔くんが、そう言いかけた瞬間。
二人の手に、恐ろしいほどの圧力が突き上げてきた。
「ぐっ」
慌てて歯を食いしばる。
しゅっという音がしたかと思うと、光がオカリナ剣の穴から噴水のように噴きだした。
下からの圧力はますます強くなる。
「こ、こいつを押さえるのか」
えん魔くんは、硬く目を閉じたまま叫んだ。もしここで手を離せば、一気に解放された光がどうなるのか見当もつかない。
熱くもなく冷たくもない光の奔流が、二人の体を突き抜けて天へと昇っていった。あるものは激しくスパークし、花火のように湖面へと散っていく。
一分、一秒が長い。
二人の手の筋肉が、自分の意思とは全く無関係に震え出した。
「まだか。まだなのかっ」
えん魔くんがうめくように言う。
鬼太郎は、軋むほどに歯を食いしばって耐えていた。
その時。
湖面で、何かがぬるぬると動いた。光が、羽天の影をくっきりと映し出している辺りである。
暴れる羽天とは関係なく、鳥の影はゆっくりと揺れはじめた。
「なんだ」
新たな妖気を感じ、えん魔くんの背筋は寒くなった。どこから現れたのかは知らないが、近い。
こんな状態で襲われたら…、そう思った瞬間だった。
「うわあっ」
鬼太郎が片膝をついた。



「鬼太郎」
えん魔くんの体にも激痛が走る。
闇の塊のようなものをえん魔くんは見た。
「冗談、だろ」
二人は、凍り付いたようにそれを見上げた。
「も、もう一匹うでんがいるのか」
鬼太郎が呆然と言う。
動けない二人をあざ笑うかのように、黒い鳥は不気味な声を上げた。
「なんでこんな奴が出てくるんだよっ」
叫んだえん魔くんの額を、真っ赤な血が伝う。
黒い鳥のくちばしは鋭かった。鳥は、攻撃を楽しむかのように、何度も二人目掛けて旋回してきた。
「俺らが動けねーのを、知ってやがる」
えん魔くんの頭上を、また、黒い塊がかすめていく。えん魔くんの赤茶色の髪が数本、宙に舞った。
今、オカリナ剣を押さえる力を抜くわけにはいかない。光は弱まるどころか、いっそう激しく噴出している。
「ちくしょう」
えん魔くんは低く呟いた。
もう、どこが痛むのかさえも解らない。霞む視界の中で、黒い鳥は確かに笑った。
えん魔くんは、力が抜けていくのを感じながら考えていた。

光をともせば、当然、影ができる。
(羽天、おまえは光だけじゃねぇ。闇まで吸い込んじまったのか。人間界には、こんなもんが溜まっていたのかよ)
「鬼太郎、もう…」
弱々しく顔を上げたえん魔くんは、思わず叫んだ。
「鬼太郎!危ねえっ!逃げろっ!」
黒い鳥のくちばしが、鬼太郎を狙っている。今までの感じとは違う。とどめを刺しにくる。
「鬼太郎!おまえがやられることはねぇ!もう充分だっ」
鬼太郎は、目を閉じたまま動かなかった。
「逃げてくれええ」
悲鳴に近いえん魔くんの声が、湖に響く。
「父さん…」
その時鬼太郎の頭の中には、夕方、丘の上から眺めた街の風景が浮かんでいた。
―人間は、闇を照らしつくすまで電灯を増やしつづけるつもりなんでしょうか?―
いつか自分の言った言葉が聞こえてくる。
―大丈夫じゃて。彼らとて何が本当の光なのかに、いつか気付くじゃろう。―
「父さん、ぼくは…」
鬼太郎は、立ち上がった。
(ぼくはそれまで、待っているつもりだ)



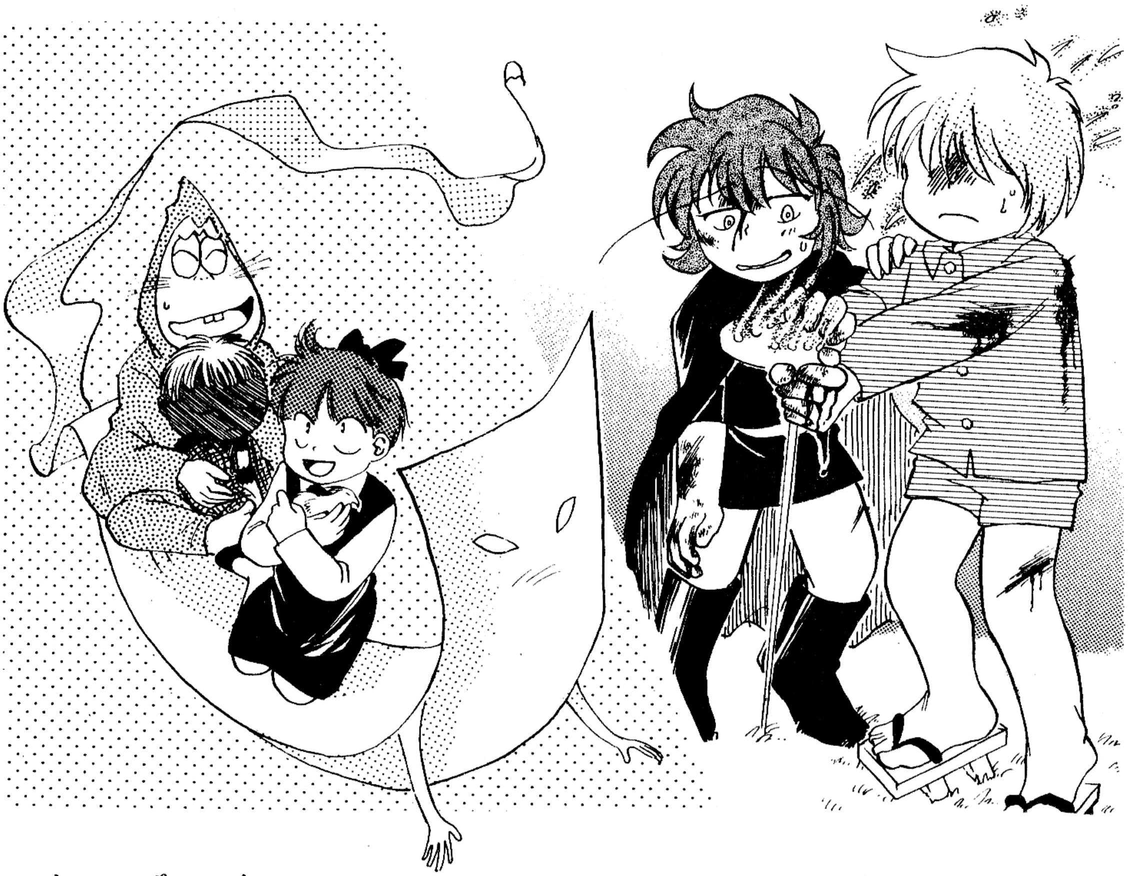
オカリナ剣を握る手に、更なる力が入る。
「いやだっ。ぼくはここを動かない」
鬼太郎は叫んだ。
「皆に、消えてほしくないよっ。ぼくは負けないし、うでんも助ける」
「鬼太郎っ」
がつん、という、鈍い音がした。
黄色と黒の壁。
それが、くちばしを受け止めている。
ちゃんちゃんこだ。
「こいづはおらが何とかするっ」
聞き覚えのある声に、えん魔くんは目を見開いた、あの小妖怪が、ちゃんちゃんこに乗ってここまで来たのだ。
「お、おまえ、どうしてここに」
小妖怪の姿は、すっと黒い鳥の中に消えた。乗り移るつもりらしい。
「やめろっ。おまえのどうにかできる相手じゃねぇ、消えちまうぞっ」
えん魔くんが、剣を離そうとした瞬間、鋭い声がそれを止めた。
「だめだっ。今放したらだめだっ」
「鬼太郎、でもっ」
えん魔くんはそう言いかけて言葉を飲んだ。いつの間にか湖を出て街の上空に来ている。羽天が暴れるうちに、ここまで着てしまったのだ。

(そうだ。今俺が行ったら、羽天が助からないどころか下の人間も)
えん魔くんは、唇を噛んだ。体の痛みよりも、自分の無力さが辛かった。
「ちくしょう…ちくしょう!」

黒い鳥の羽音は、遠のいて行った。
小妖怪が、どうやってそれをなだめたのかは解らない。鳥に乗り移り、操ることができたのか、それとも、羽天の形をとった黒い鳥にも小妖怪の心が通じたのか。

どれくらいの時が経っただろう。
えん魔くんは、自分が倒れているのに気付いて、がばっと起き上がった。
「剣は?」
鬼太郎が、剣を握ったまま気を失っている。
剣から出る光の流れはもう弱まって、蛍ほどの光の玉がふわふわと迷い出るだけだった。
えん魔くんはそれを見た途端、体中の力が抜けた。
「やった…」
ふと、気が遠のきかけた瞬間。
「なっ?」
足元が唐突に無くなった。羽天が縮んでいるのだ。
えん魔くんは鬼太郎の腕を掴んで飛び上がった。

「羽天!」
指が、その羽をかすする。
小さな鳥の姿に戻った羽天が、暗い街に落下していく。
「くそっ」
急降下するえん魔くんの視界を、白いものが横切った。
「一反木綿!」
その上に乗っているのは、ネコ娘だ。
「ちゃんと受け止めたよっ」
羽天は、彼女の両手に包まれていた。
「間に合ったみてぇだなっ」
更にねずみ男が、ネコ娘の後ろから顔を出す。彼の腕には、あの小妖怪がぐったりと抱きかかえられていた。
えん魔くんが、ほとんど落ちるようにして一反木綿の上に降り立つ。
「ばーか。おっせーんだよ」
軽くねずみ男の頭を小突くえん魔くんは、そう言いながらも笑っていた。
鬼太郎が目を覚ます。
「ネコ娘」
「この子なら大丈夫。おばばに治療してもらえば、すぐ直るから」
「そっか」
鬼太郎の表情が、やっと、柔らかくなった。
「うう…」



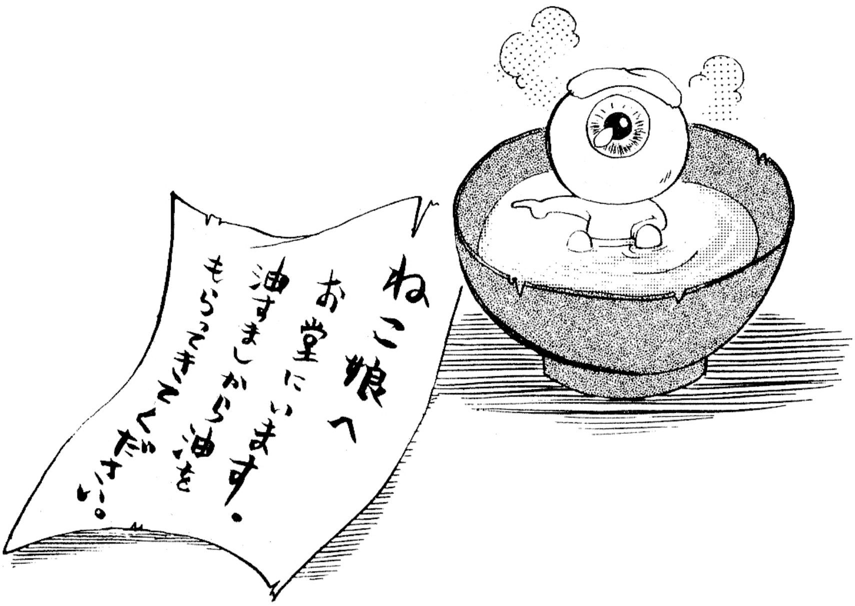
ねずみ男の腕の中で、影が薄っすらと目を開ける。
「こいつ、急に落ちてきたんだぜ」
ねずみ男の話によれば、黒い鳥がこちらへ向かってきたかと思うと、突然姿を消し、代わりにこの小妖怪が落ちてきたらしい。おそらく、羽天がエネルギーを全て吐き出すのと同時に、それと対をなす闇の塊も力を失ったのだろう。
「うでんは…」
影のぼやけた視界には、心配そうにこちらを見ている皆の顔が映った。
「うでんは助かったんだな」
「ああ」
えん魔くんは、滅多に見せないやさしい顔で頷いた。
「そっか…、おら、あんだにお礼、言わねえと」
「何言ってんだ。おめえだってがんばったじゃねーか」
えん魔くんに肩を叩かれ、影は弱々しくも嬉しそうに微笑んだ。
しかし影の体はまた、薄くなり始めている。
「鬼太郎さん、おら、少しだけ解っだ気、する」
影の異変に気付いた鬼太郎が、慌ててちゃんちゃんこでその体を包んだ。
「あの黒い鳥ん中は、さみしいとが、こわいどが、そんな声でいっぱいだった」
影は、激しく咳き込むと、震える体を無理に起こして羽天の方へと手を差し伸べた。

「だがら、半分くらいは、解っだ気ぃするんだ。あんだの、言いかったごと。おらは何に、怒ってたんだろうな」
　そう言った影の目は、もう見えなくなっているようで、手探りで羽天の体を撫でてやると、ほっとしたように鬼太郎にもたれかかった。
　体が軽い。
　えん魔くんは、皆をかき分けるようにして影に近づいた。
「お、おいっ」
　影の体は明滅している。
「羽天も助かったんだぞ！」
　影は、目を閉じたきり何も言わなかった。
「おめーが消えてどうするんだよ！」
　えん魔くんが叫ぶ。
　鬼太郎の腕が、ふっと、軽くなった。
「だめだ。消えちゃ、だめだ！」
　鬼太郎の手の中で、影の体が壊れていく。影は硝子が砕けるように無数の破片になると、夜の町へと散って行った。
「冗談、だろ？」
　ねずみ男が呟く。
「死んじゃったの？」
　ネコ娘は、信じられないといった様子で鬼太郎を見た。
　鬼太郎は何も言わず、ただ、空っぽになったちゃんちゃんこを抱きしめた。

　空から、光の雨が落ちてくる。
　羽天の放出したエネルギーが、雨のように降り出したのだ。
　光が街に戻っていく。
　道路わきの街灯に、小さな商店街に、次々と明かりは灯った。
　どこかの庭先で、子どものはしゃぐ声がする。
「お父さんも来てみなよっ。すっごくきれいなのっ」
　コンクリートの壁に、アジサイの葉に、光の粒が当たってははじけ、消えていく。
　見渡す限り、光のシャワー。
　この光が何なのか、その子どもは知りもしないだろう。
　えん魔くんは、影の体が落ちて行った先を見つめたまま、拳を握り締めていた。
「お母さん。すごいね。きれいね」
　庭に出た子どもの頬に、髪に、光の雨が当たる。
　光の雨は、一晩中降り続いた。

「鬼太郎っ。たっいへん！」
　ネコ娘が駆けて来る。
　あの事件から一週間が経っていた。ここは、ゲゲゲの森である。
「羽天が、羽天がいなくなっちゃった！」
　しかし、木戸を開けたその先には、のんびりと風呂に浸かる目玉のオヤジがいるばかり。

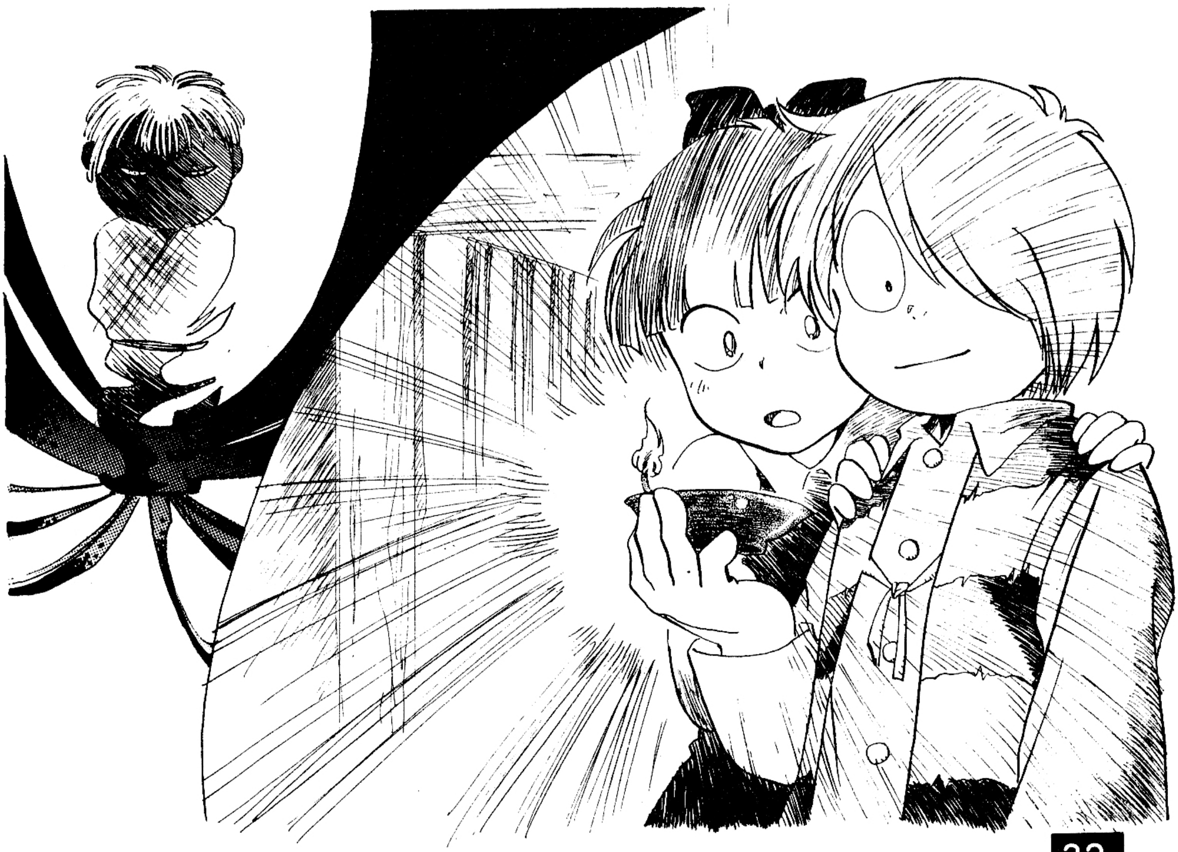

SORA
I am the water's voice...!!



「なんだ、鬼太郎は？ねえ、どこ行ったの？」
なんだは無いだろう。一言文句でも言ってやりたかった目玉のオヤジだが、彼は小さな手で濡れ手拭を頭に乗せると、茶碗風呂の中で立ち上がった。
「ほれ、そこじゃ」
目玉のオヤジが指差した先には、一枚の紙切れがある。
「これ？」
ネコ娘は、その手紙に素早く目を通すと、丁寧に折り畳んでポケットに入れた。鬼太郎の、手書きの手紙である。
「ありがと、オヤジさんっ」
言うが早いか、ネコ娘は戸も閉めずに鬼太郎の家を飛び出し、森の奥へと走って行ってしまった。
残された目玉のオヤジは思う。どうしてああも、落ち着きが無いのか、と。
「ネコ娘といい…、えん魔くんといい…」
つい今し方、窓から竜巻のごとく入って来て、嵐のように出て行ったえん魔くんを思い出し、目玉のオヤジはため息をつく。
「お湯を…、少しくらい足して行っても良いのにのう」
ネコ娘は、古いお堂の戸を開けた。
「鬼太郎！持ってきたよ。極上の油なんだからっ。あ…、えん魔くん」
あからさまに声の調子が変わるので、えん魔くんはむっとした様

子だった。
「俺もいて悪かったな」
ネコ娘、えん魔くん、そして鬼太郎の三人が集まったのは、あの影と羽天が住んでいた神社である。
「何をやるつもりだよ、鬼太郎」
少し浮かび上がった行儀の悪い格好で、えん魔くんはしゃがみ込んでいる鬼太郎は、小さな陶器の破片を組み合わせようとしているらしい。
「や！遅れてすまねえ」
もわっとした暑苦しい空気とともに、ねずみ男が入ってきた。
「なんだ、おめーもか」
えん魔くんは嫌な顔をした。暑い上に、臭くなってしまったのだから仕方がない。
「なんだよ。俺だって、鬼太郎に頼まれたんだぜ？ほらよっ。おばばから借りてきた妖怪接着剤。それと、こいつも…」
ねずみ男の肩から飛び立った鳥が、鬼太郎の頭にとまり、口にくわえていた破片をその手のひらに落とす。
「ありがとう、うでん。破片はこれで全部だよ。もうすぐだからね」
羽天は、こんな所にいたのだ。
「なんだ、良かった」
ネコ娘も、鬼太郎の横にしゃがみ込んだ。
「ね。何か手伝おっか？」
「ん、大丈夫。あとは接着剤をつけるだけだから」
何をしに集められたのかまでは知らされていないので、ネコ娘もねずみ男もえん魔くんも、顔を見合わせている。
「よし」
鬼太郎は、あくまでマイペースに事を進めると、破片の継ぎ目に息を吹きかけた。後は、接着剤の威力でどんどんひびが無くなっていく。
「できたっ」
立ち上がった鬼太郎が持っているのは、古ぼけた小皿だ。
「何だそりゃ」
あまり高そうなものには見えないので、ねずみ男がぼやいた。
「ネコ娘。油をかしてくれ」
「うん」
鬼太郎は、皆の見守るなか、小皿に油を注いだ。
「鬼太郎。おまえそれ、まさか」
えん魔くんが身を乗り出す。
「えん魔くん、ここに、火をつけてくれないか」
鬼太郎は、小皿にろうそくの芯のようなものを浸した。
「よっし、そういうことなら！」
「おいおい。何が起きるんだ」
事態の把握できないねずみ男に、えん魔くんは笑って言った。
「ま、見てな」
えん魔くんがステッキを構える。お堂の中が、静まり返る。
ステッキから出た小さな炎は、ぽっという乾いた音を立てて、小

皿の芯へと火を点した。
「きれい」
ネコ娘の大きな瞳に、炎が映る。
薄暗かったお堂は、一瞬にしてほんのりと明るくなった。
「この皿は、ずっと昔。こんなふうに火を灯すために使われていたんだ」
鬼太郎の顔は、暖かな炎に照らされて赤く見えた。
「長い間、大切に使われていたんだと思うよ。だから…」
そう言う間に、木の床で小さく揺れていた丸い皿の影が、むくむくと動き出す。皿も、油も、炎も包み込んで、大きくなっていく。
えん魔くんが頷いた。
「昔から、器物は化けるって言うからな。その類だ」
「それじゃあ！」
ネコ娘と、ねずみ男が鬼太郎の両肩からそれぞれ顔を出す。
影はもう、人の形をとりはじめている。
『おばけは死なない♪』って、ね」
鬼太郎が羽天を人差し指に乗せ、そっと床に降ろしてやると、羽天はすぐに飛んで歩いて、体をすり寄せた。
「おらは…」
あの、小妖怪がここにいる。
「やったあ！」
うれしさのあまり、ネコ娘は鬼太郎に抱きついた。ねずみ男までが、その上から飛びついた。



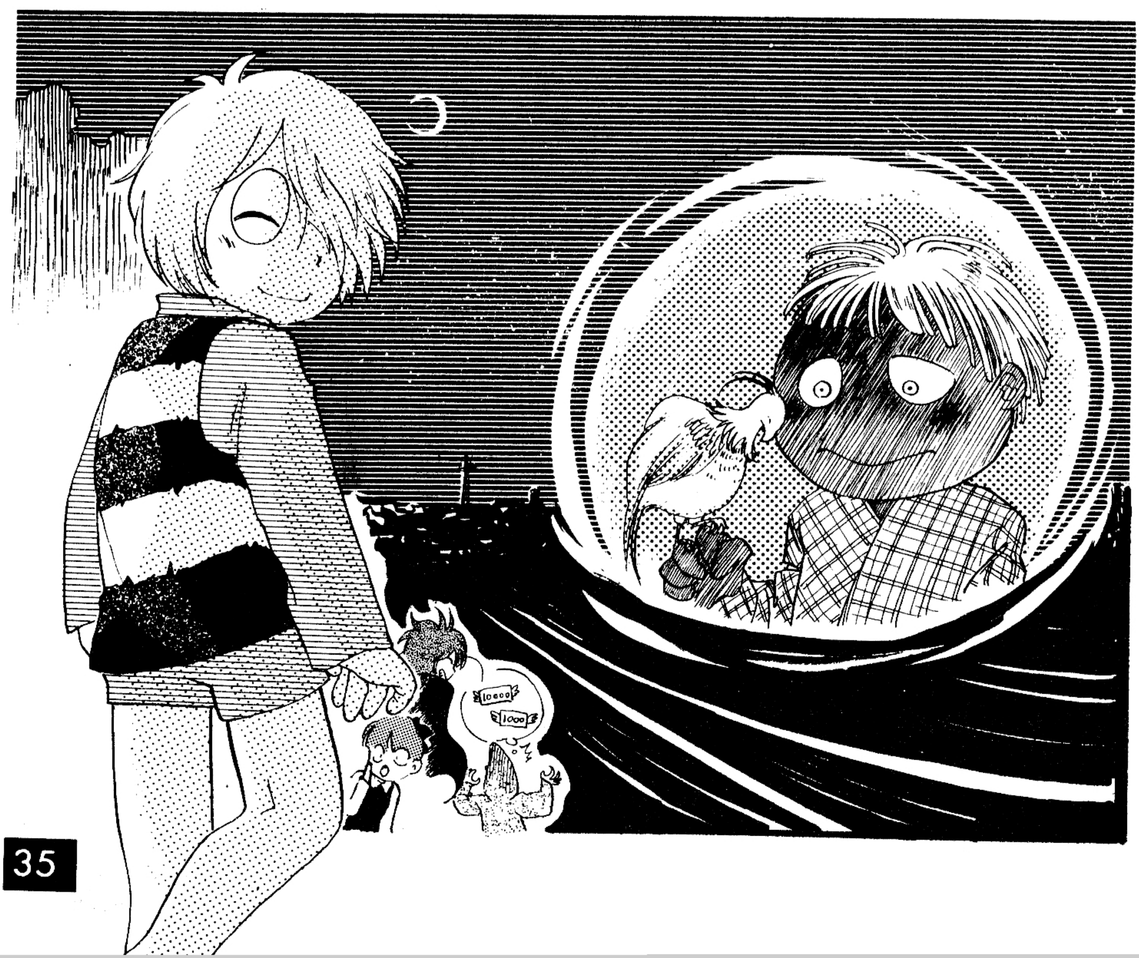


「おら、消えちまったんじゃ…」
両手で羽天を包み込むように抱き上げると、影は鬼太郎の顔を見た。
「おら、生き返っだのが？」
鬼太郎は、答える代わりに微笑んでいる。
「鬼太郎！」
えん魔くんが、ネコ娘を押し退けて鬼太郎の首を抱え込んだ。
「全く、おまえは大した奴だぜ！」
影が消えたあの時、鬼太郎だけが見逃さなかったこと。
「おいっ。鬼太郎に感謝するんだな。こいつじゃなかったら気付かなかったぜ」
えん魔くんは、鬼太郎の頭を乱暴に揺さぶった。なんだか、そうせずにはいられないほど嬉しかったのだ。
「ちょっと、やめてよえん魔くん。鬼太郎困ってるじゃない」
「め、目が、まわるかも～」
突然騒がしくなってしまった周囲に、影は戸惑いながらも笑った。
「お！はじめて笑ったな」
えん魔くんが言う。
「かわいいじゃない」
「うんうん」
ネコ娘の言葉に、鬼太郎が頷く。
えん魔くんに蹴飛ばされていたねずみ男が皆をかき分けて前へ出た。

「なあなあ、おまえ、名前はどうすんだよ」
「ナマエ」
「おうよっ。ビビビのねずみ男様！みてえな、ハイセンスなナマエよっ」
それに関してはかなり疑問があるが、
「でも、ナマエってのはいい考えじゃない」
ネコ娘も大賛成だ。
「名前が無かったら、呼ぶ時に不便だもん」
「お、おらのごと、呼んでくれるんか」
「あったりまえじゃない」
「あたりまえだよ」
「あたりまえじゃんかっ」
「あたりまえだろ」
影は、目を瞬いた。
「じゃ、じゃあ」
腕組みをして考える。大切なことだから、よくよく考えなければならない。
「え〜と」
「なになに」
「おらの名前は…」
「うんうん」
「名前は…」
「名前は？」
一々頷く皆に、影は小声で言った。
「こううん、がええ」
「コウウン？」
えん魔くんが、ネコ娘が、ねずみ男が繰り返す。
固まったような三人と、困ったような影を前に、鬼太郎は手を叩いた。
「すごくいいよ」
「う、うん？」
ネコ娘が首をかしげつつも頷く。
「そうかあ？」
えん魔くんは、納得のいかない顔をした。
「ダメかな」
影が、遠慮がちに問う。
「や、べつにいいけどよ」
ねずみ男は、自慢の鼠髭を撫でながら考え込んでいた。
「何で、こううん、なわけ？」
そう、解らないのはそこなのだ。皆が影に注目する。
「だって、うでんが…」
そこへ、タイミングを合わせたように羽天が「コウウ」と鳴いて、小妖怪「こううん」に体をすり寄せた。
「だって、うでんがおらのごと、そう呼ぶんだもの」
こううんは、照れて赤くなり、皆が笑った。

もう、消えることは無い。
ここでなら二人は暮らして行ける。
鬼太郎は願った。幸せな時が長く続くことを、そして、新しい幸せが皆に灯ることを。この世には、怖いことも辛いこともあるけれど、まだ知らない、嬉しいことだっていっぱいあるのだから。

夕日の中、四人は神社を後にした。
二つの小さな影は、境内にある銀杏の木に登り、ずっとその姿を見送っていた。
辺りが暗くなり、いろいろな明りが灯るまで。



月がとっても青いから♪



わぁ、きれいな月！
ロマンチック♡
うっとり
鬼太郎もそう思わない？
たくあん
たくあんに見えますね、父さん
数日前はバナナのようじゃったがのう
うまそうだ
もう
でも

カナカナが啼く
額に梵字をつけたまま
生きたい　生きたいと啼いている

河を流れる螢の骸
夜を彷徨う蝶の脱殻

幾百もの魂が
君へと　還る

肌で感じて
――コオロギの声が響く前に



盂蘭盆

八月十五日

—最近、幽子が弁当を作ってくれる。うれしくない訳じゃない。だが、それは地獄童子と呼ばれるこの俺にとって死活問題だったりするのだ。

「童子さーん。お弁当、忘れてますよー」

—などと、大声で呼ばれた日にゃあ、その後いったいどんな顔をして鬼や亡者を怒鳴りつければいいんだ？

地獄童子は、切り立った岩壁をくりぬいて作られた、地獄で働く者にとってはごく一般的な一軒家の窓辺で、ぶつぶつと考え込んでいた。

亡者のすすり泣き、魂の叫び声が響くこの地獄の果てで、手作り弁当を食べるという何とも不条理な毎日が、もう一ヶ月は続いている。いったいこの不毛の大地からどうやって、ホウレンソウやら大根やらを仕入れてくるのかは知らないが、幽子は毎朝きっちり弁当を作ってくれた。

「童子さん。今日は卵焼ですよ」

童子は返事をする元気もなく、窓枠に顎を乗せたまま「んー」とだけ唸った。

—やばい。絶対にまずい。いや、弁当はうまいのだが、この事態はまずい。

童子はため息をつき、しかし、ため息ばかりついていたところで何の解決にもならないな、と思い直して立ち上がった。

「幽子。今日は針の山辺りに行って来るつもりなんだ。どうもあの辺りは鬼と亡者の間にいざこざがあって落ち着かないからな。まあ、その…大変なわけだ」

大変だから弁当を食っている暇はないのだぞ、と、地獄童子は言いたかったのだが、いざ幽子を前にすると何とも間抜けな台詞しか出てこない。

「童子さん。それならご飯は大盛ですね」

何故そうなるのかは解らないが、幽子はとにかくにっこりと微笑んだ。こうなると童子も引きつった笑いを浮かべて、可愛らしい弁当箱を受け取るしかない。

「じゃ、じゃあ行ってくるから」

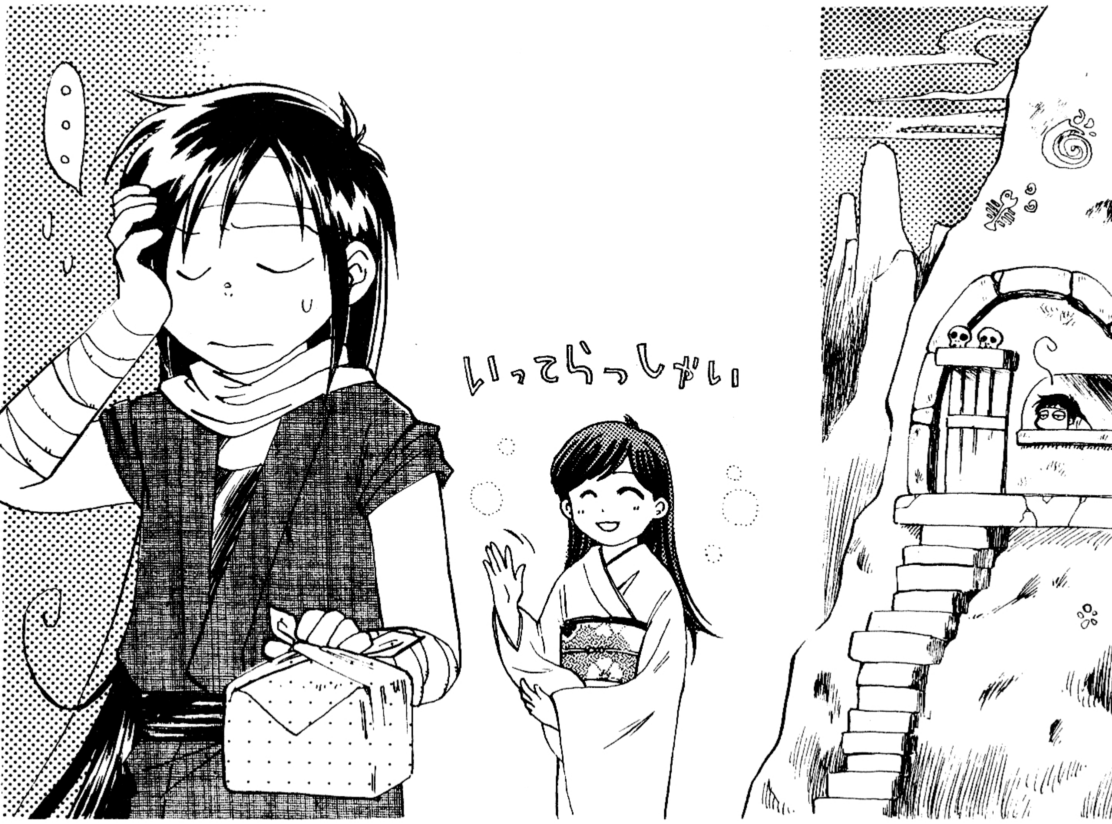
「はい。行ってらっしゃい。気をつけてくださいね」

幽子はすっかり世間知らずになってしまった。

—あまり外に出してやらなかったのがいけなかっただろうか。

童子は、何も無い、岩だけが延々と続く場所を走りながらそう思った。地獄は危険な場所である。幽霊である幽子が外に出ようものなら、いつ鬼に、亡者と間違われ、連れて行かれるか解らない。自分と一緒の時以外は家の外には出ないようにと童子は幽子にきつく注意していた。

「あいつと暮らすようになって長くなるけど、忙しいからって一緒に外に出る事なんてあんまりなかったよなあ」



ここは地獄。忙しいという理由以前に、幽子と二人仲良くお散歩という場所ではない。それに、罪人の苦しむ恐ろしい叫び声を、幽子には聞かせたくない童子であった。

「まいったな」

地獄童子は長い黒髪をくしゃくしゃにして、頭をかきむしった。

断れば済む話なのだが、あの笑顔にはどうしても負けてしまう。

と、その時、

「おう。童子」

巨大な棍棒を担いだ青鬼がいきなり声をかけてきた。

「どうしたぁ。浮かない顔しやがって」

「あ、ああ。まあな」

何とも答えようがないまま、童子は不機嫌そうに立ち止まった。

「今日は卵焼だろっ。元気出せやー」

「ああ」

―って、ん？

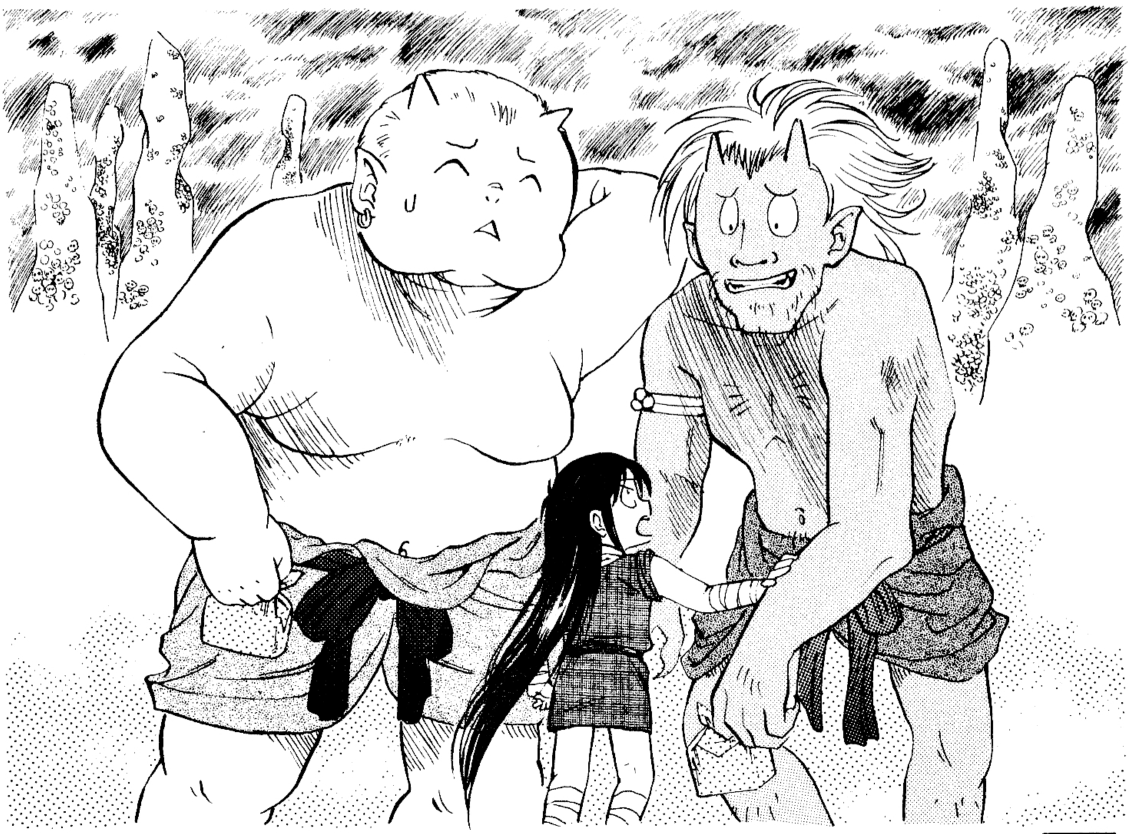
地獄童子の顔が、一気に真っ赤になった。

―何でこいつがそんな事を知ってるんだ？

笑いながら去っていく青鬼の大きな背中を呆然と見送りながら、童子はしばし立ち尽くした。

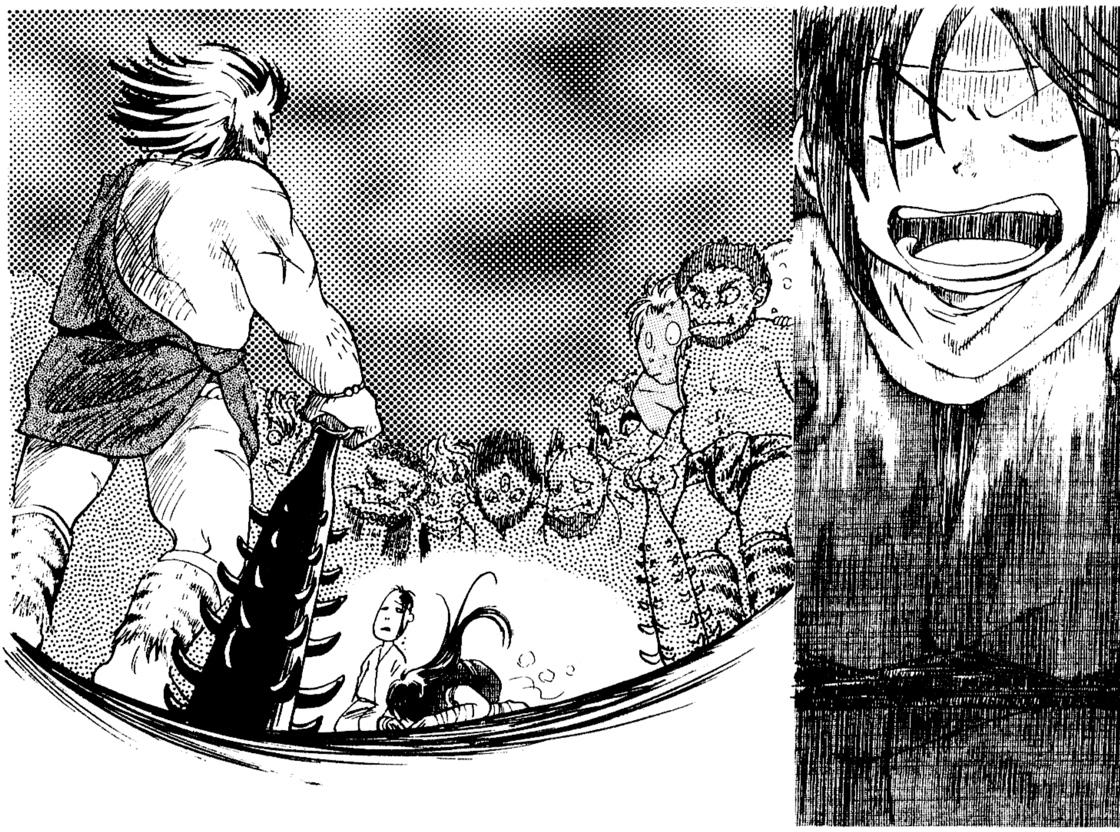
―ちょっと待て。冷静になれ。弁当は隠れて食ってるし、ばれるはずがない。ばれたって今日の弁当の中身まで知っているはずがない。まさか、立ち聞きしたって事もない、よな。じゃあ何で…。

すっかりパニックに陥った童子のすぐ横を、痩せた黄鬼と力士のような緑鬼が通った。
「今日は卵焼かあ。俺、毎日楽しみでさあ」
黄鬼がため息まじりに言い、
「梅干が無いって困ってたよな。今度持っていってやらにゃあ」
緑鬼は鼻のつまった声を出す。
嫌な予感、というものが、童子の胸を電撃の如く駆け抜けた。
「ちょっと待て、おめえら。今なんて言った？」
自分の三倍はあろうかという緑鬼の腕を掴んで、童子は二匹の鬼を呼び止めた。まさか、とは思うが、鬼たちの手にある四角い包みは…。
「おい、それって…」
緑鬼も黄鬼も、困ったように愛想笑いを浮かべている。
「ゆ。幽子ちゃんを怒んないでくでよな。頼んだのは俺らなんだよ」
「頼んだって、まさか」
地獄童子は目眩を覚えた。
「だって、おまえばっかりずるいじゃねえか。鬼だって手作り弁当が食いたい日もあるぜ」
―幽子の奴。いったい何やってんだよ。
童子は、投げ捨てるように緑鬼の手を払うと、もと来た道を全速力で逆走して行った。
「だめなんですか？」



「当り前だ」
とうとう怒鳴ってしまった童子だったが、仕方がない。
地獄の鬼は、まさに鬼の名にふさわしい恐ろしい存在でなければならないのだ。亡者に辛く当たるのが仕事だから、行き過ぎなくらいで丁度いい。だが、あまりに乱暴な鬼がいた場合は、童子が亡者との間に入って抗議してやる。もちろん、話し合いなどですむはずもなく、たいていは殴り合いの大喧嘩になる。童子と鬼。両者が敵対関係にある事で、厳しいままに力の均衡が保てるのだ。鬼と童子が一緒の弁当を食べているなど、言語道断、あり得ない。
「でも、皆さん喜んでくださるし、材料だって持って来てくださるんです」
だからと言って、駄目なものは駄目だ。
「いいか？幽子。ここは地獄なんだぞ。そんな甘っちょろい事が通用するような場所でもねえし、だいたい弁当自体、地獄じゃあ非常識なんだ！」
鬼は亡者の肉体や魂を食らう。童子だって地獄では、食事という概念が無い。それでも生きていける。楽しく食事などという事が一切無いのが地獄なのだ。
「だけど…」
幽子は小さな声で言った。
「わたし、皆さんが少しでもやさしい気持ちになれたらって思ったんです。だって、いつも恐ろしい顔をしていたら、自分自身でも辛いでしょう」
解っていない。童子は、ガクンと首を項垂れた。幽子は地獄という状況を、全然解っていない。
「あのなあ。笑ってらんねえのが地獄なんだ。亡者なんて体がちぎれて、腹すかして、血ぃ吐いて、骨になって転がってんだぞ」
「辛いでしょうね」
幽子は、泣き出しそうな顔をしている。もう呆れたと言うように、童子は頭をかかえた。
「ここは地獄。罪の償いをする所だ。辛くて当り前なんだよっ」
童子は、つい、鬼や亡者を怒鳴りつける時の癖で大声を出してしまった。
「…御免なさい」
幽子の目には、涙が溜まっている。
—いや、だけど、ここで甘い顔をしちゃあ駄目なんだ。
童子は、ぐっと拳を握り締めた。
幽子を、こんな世間知らずにしてしまったのには、童子にも責任がある。何か問題を起こして取り返しのつかないことになる前に、しっかり言っておかねばならない。
「幽子。もう、絶対に弁当は作るな。鬼が来ても戸を開けるな。いいな！」
「はい…」
幽子は、小さく頷くと、隣の部屋に駆けて行ってしまった。
たぶん泣いているんだろうな、と、童子は思った。
「しょうがねえ、よ」

童子は呟くと、ぺたんと椅子に座って冷たい岩のテーブルに頬をつけた。
「てめえ、脱走した上に何か食いやがったな！」
すさまじい形相で、赤鬼が一人の餓鬼を踏みつけた。
「なんだ、どうした？」
騒ぎを聞きつけた童子が、人垣ならぬ鬼垣をかき分けて輪の中心に入って来る。家から近いところだったので、餓鬼がすり潰されてしまう前に到着する事ができた。
「止めるな。童子」
地鳴りのような赤鬼の怒鳴り声が響く。
「こいつあ、自分の持ち場ぁ離れやがって、しかも餓鬼のくせに己の罪も忘れてモノ食いやがったのよ。切り刻まれて当然。この棍棒で肉片にしてやる」
―やばい。
童子は顔をしかめた。この場合は、圧倒的に餓鬼の方が不利だ。
「おまえ、脱走したのか？」
童子が尋ねると、体の震えが止まらないらしい餓鬼がすがるような目をして頷いた。
「おらあ。辛くて、辛くて…」
皮と骨ばかりの体からは、涙も出ないらしい。
「つい、鬼の目の届かねえ間に逃げて、ここまで来ちまったんだあ。そしたら、そしたら地獄に仏。あの方が握り飯を恵んでくださったんだよう」
「あの方だって？おい、そいつは誰だ」
地獄で亡者に食糧を与える馬鹿などいるはずもない。下手をすればその者も罰せられる。
「知らねえ。ただ、本当に仏様みてえな綺麗な娘さんだったあ」
それだけ言うと、餓鬼は鬼の棍棒に打ちのめされて地面に顔をめり込ませた。
「おらあ。ここは地獄だぞ。仏様のお助けがそうそうあるわけねえだろがあ」
「ちょ、ちょっと待ってくれ赤鬼」
「待てだとう？」
怒りでさらに赤くなった赤鬼を何とか止めて、童子は餓鬼の首を掴んでその体を持ち上げた。
「まさか、その娘。俺くらいの長い髪で、白っぽい着物を着た奴か？」
鬼には聞こえないように、餓鬼の耳元で囁く。
「ああ。そうだ。地獄じゃあ考えられねえくらい、やさしい顔をした娘さんだ」
―幽子だ。
目の前がくらくらするような気分で立ち上がると、童子は空に向かってため息を吐いた。
―あいつ、ついにやりやがった。
このままでは、幽子まで罰せられる。もう、考えている余裕はなかった。



「赤鬼ぃい！」
童子は、周囲のざわめきをかき消すような大声を出すと、真正面から赤鬼を睨みつけた。
何だやる気か？とでもいうように、赤鬼も身構える。
「赤鬼！この場は俺に免じて許してくれっ」
童子は、土埃を立ててその場に座り込むと、地面に頭をこすりつけて土下座した。
「な…」
思ってもみなかった童子の行動に、赤鬼はぽかんと口を開けている。
「こいつに食い物をやったのは幽子なんだ。あいつに地獄の厳しさを教えなかった俺が悪い。怒りが収まらないなら気が済むまで俺を殴れ！だから頼む。この餓鬼と幽子の事は目をつぶってくれ！」
あの地獄童子が土下座をした。周囲の鬼たちも顔を見合わせている。赤鬼も、どうしたものか困った様子で振り上げた棍棒をゆっくりと下ろした。
「ま、まあ許される事じゃあねえ」
「解ってる。だから、こうして頼んでるんだ。何とか。何とか！」
童子が、さらに頭を下げ、地面に顔を擦りつけた。
「う」
いつもなら言葉より先に殴りかかってくる童子がこんな様子では、鬼だって調子が狂う。
「うー。その、何だ。まあ」
唸る赤鬼の横に、黄鬼が進み出て、何事か囁いて行った。

赤鬼が、眉間に精一杯の皺を寄せて頷く。

「どうせ餓鬼じゃ、モノ食ったところで空腹からは逃れられまい。だが、脱走の罪は重いぞ！この先も長く、苦しむがいい」

「じゃあ…」

握り飯の件は見逃す、という事なのだ。

「すまねえ。赤鬼」

「二度目はないぞ、童子」

こういう許し方をするのはどうもむずがゆいらしく、赤鬼は口をへの字に曲げたまま、ずしんと棍棒で地面を鳴らした。

餓鬼は、別の小柄な鬼に引きずられて行った。

―二度目はない…か、確かにそうだ。

童子は立ち上がると、体についた土を払いもせずに、ざわめく鬼たちを押し分けて駆け出した。

この赤鬼が話の解る相手だったから良かったものの、下手をすれば餓鬼も幽子も永遠に地獄で苦しむ事になったのだ。

乱暴に戸を開けて、童子は肩で息をしながらその場に立った。

「童子さん？」

そこには、何も知らない幽子がきょとんと座っている。

「馬鹿野郎！」

ただならぬ童子の様子に、幽子も立ち上がった。

「おめえは何て事をしてくれたんだよ。餓鬼に食い物やるなんざ、ほんっとに、この、大馬鹿野郎が！」

「だ、だって、苦しそうに…」

「苦しむのが地獄だって言っただろ。解りもしねえくせに、余計な事するんじゃねえよ。俺の身にもなってみろ！」

幽子が罪に問われるような事になったら、そう思うだけで童子の胸が痛んだ。そんな事になったら、どうして良いかも解らなくなる童子である。

「でも」

幽子も、いつになく大きな声を出していた。

「わたしはこの地獄で、ただ家の中にいるだけで」

自分だけがのうのうと暮らしている。幽子は思うのだった。外に溢れる叫び声を恐れて、この小さな部屋の中で目を閉じている。

「何かしたかったんです。少しでも、誰かの助けに…」

「じゃあおめえは、鬼にきざまれてでも餓鬼どもに食い物をやるのかよ？何千何万の餓鬼全部に、食い物配って歩くのかよ？」

童子はもう、言葉を止められなかった。

「できねえ事はするな！おめえのやった事は無駄なんだ」

「それなら、できないからって何もしないの？何もしないで目をつぶるんですか？」

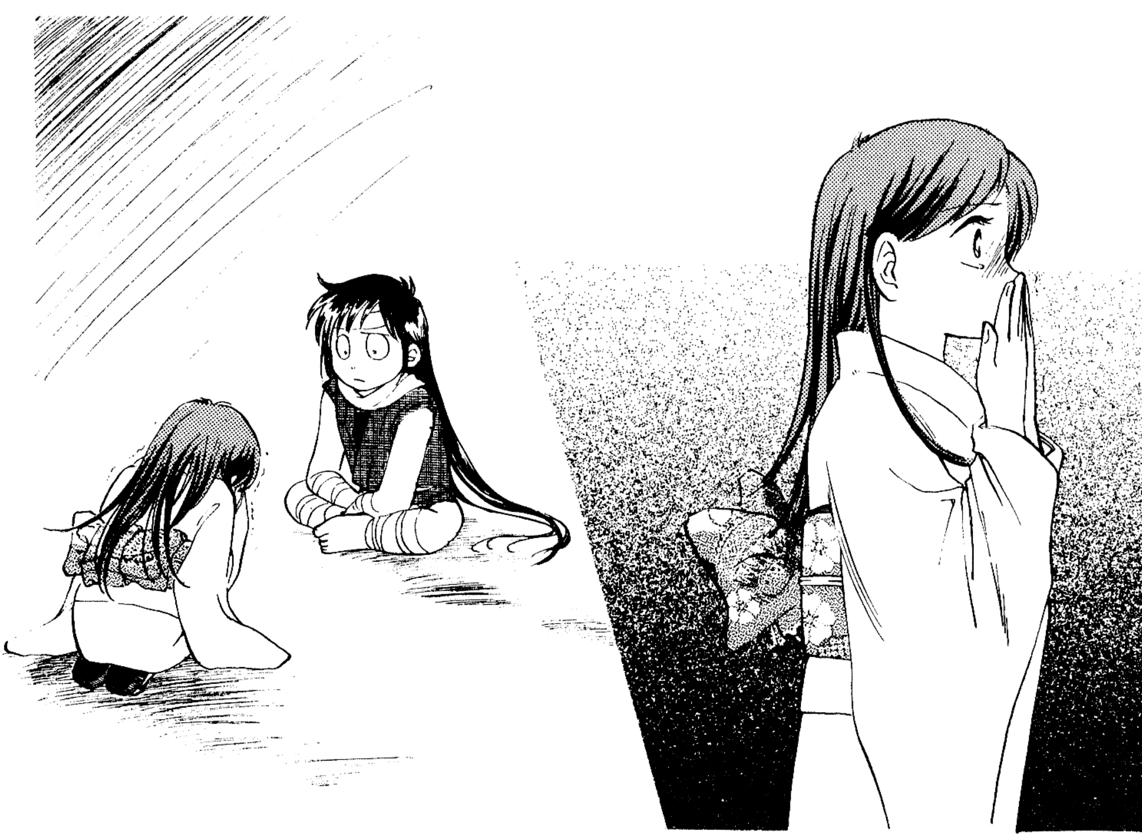
「おめえのした事は、すり潰されても文句が言えねえような重罪をあの餓鬼にかける事になったんだぞ！」

幽子は、それを聞いて青ざめた。

「そんな…」

唇が、小さく震えている。自分のした事の重大さがやっと解った

のだ。
　それを見て、少し言い過ぎたと思い、童子も声を和らげた。
「今回だけは、鬼の奴らも許してくれた」
「あの餓鬼さんは…」
「脱走の罪には問われるだろうが、食い物に関しちゃ無かった事にするってよ。ただし、特例中の特例だからな」
「ご免なさい…」
　その言葉は、童子にも辛かった。童子のために、幽子は地獄で暮らしている。童子のために幽子は、こんなにも苦しんでいる。
「幽子…」
　童子はうつむくと、小さく呟いた。
「俺も、おまえの気持ちは解るつもりだ」
　苦しむ人を見て、そんな人がいることを知って、辛くならないような神経の持ち主なら、童子は地獄で、こんな仕事をしてはいないだろう。ただ、自分を全て捨ててまで人を助けることは出来ない。そこまでの善人ではないし、自分は神でもない。そうした所で、自分に何が出来るのかを、童子だって考えてきた。
　何よりもこの場所で、生きて行くのだから。
「幽子」
　童子も床に座ると、幽子に対して、というよりは自分自身に対して言った。
「確かに、できねえからって目えつぶってんのもひでえ奴だよな。何かがしたいってのも解る。だけど、やり方を間違えるな。どんな

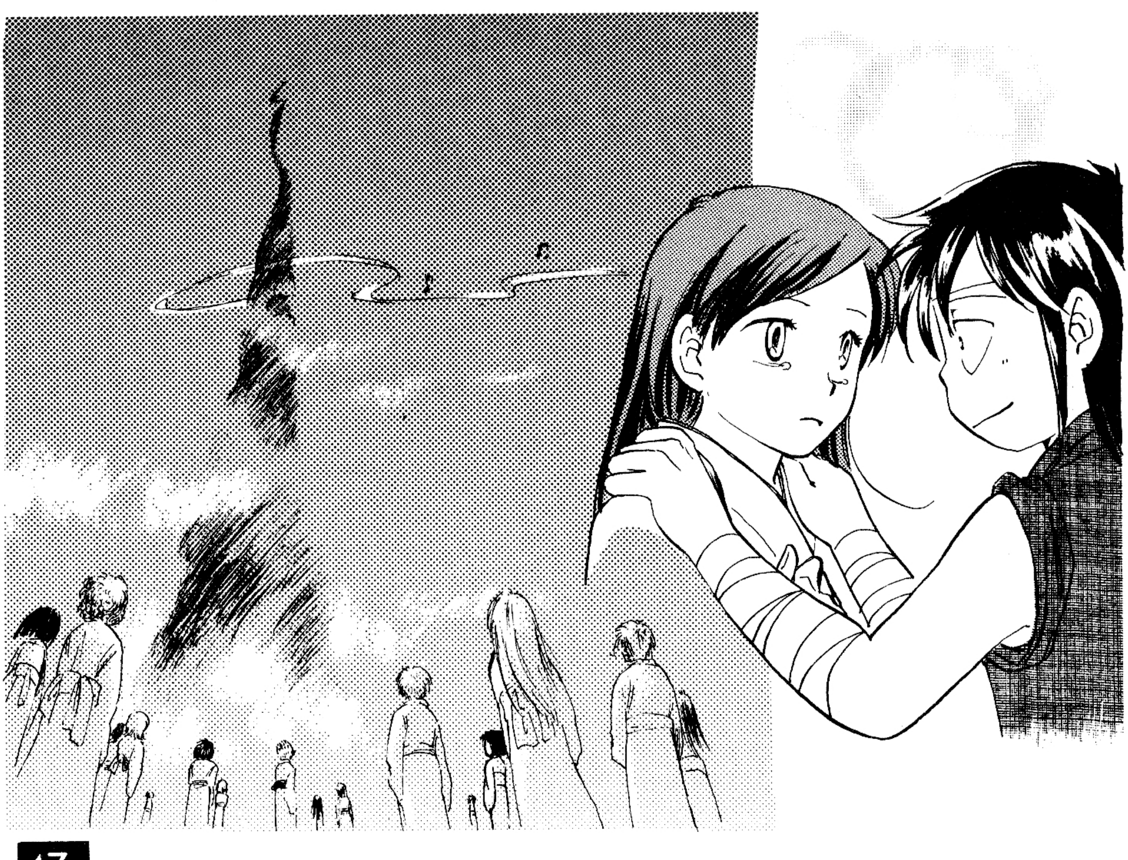


に真心込めたって、やり方を間違ったら相手を苦しめるだけだ」
幽子は、すぐに泣いてしまう自分の情けなさに、更に大粒の涙をこぼして頷いた。
童子もそれ以上、言ってやれる事が思いつかず、幽子が泣き止むまでずっと傍にいてやった。

あれからすっかり塞ぎ込んでしまった幽子は、家から一歩も外に出なかった。童子も気にしてはいたが、仕事が忙しい。
そんなある日、出かけたはずの童子が中途半端な時間に帰ってきた。
「どうかしたんですか?」
幽子が不安げに、戸口から顔を出す。
童子はちょっと怒ったような表情で背を向けると、片膝を地面につけて屈んだ。おぶされ、という事らしい。
「え?」
幽子が驚いて、目を瞬かせていると、童子は不機嫌そうに言った。
「これから行く所は、かなり道が険しいんだ。おまえが歩いたんじゃどれだけかかるか解らねえ」
「どこかへ行くんですか?」
幽子は、少し怯えるように尋ねた。
「早くしろよ」

風のような速さで幽子が連れてこられたのは、切り立った山の中腹にある、岩肌に出来た小さな窪みだった。遥か眼下には、無数の餓鬼どもがうごめいている。
「ここは…」
幽子は、掠れた声を出した。
「よく見ろ。あいつらは今、おまえには信じられないような苦痛を受けているんだ」
幽子は恐る恐る、でもしっかりとその光景を見た。
「あいつらの苦しみを全部受け止めるなんて事は考えるなよ。ただ、少しだけでも解ってやればいいんだ。そして、自分の出来る事を、本当に気持ちを込めてやればいい」
童子は幽子の肩に手を置いて正面から向かい合うと、やさしい表情で言った。
「あいつらに、歌を歌ってくれないか?」
「え?」
幽子は驚いた。突然そんな事を言われても、どうしていいのか解らなかった。確かに現世では歌が好きで、人前で歌ったこともあった。しかし地獄では歌った事などなかったし、今は歌を歌えるような気持ちになれそうもない。
「あいつらの苦痛は、確かに永遠とも思えるくらい長く続く。でも、本当に永遠ではないんだ。地獄の罰もいつか終わりが来て、現世に生き返ることができる。その日が来る事を忘れないように、ほんの少しの間だけ、苦しみ以外の感情が持てるように、あいつらに歌を歌ってやってほしい」

「でも、そんな事を地獄でしたら…」
あの日の恐怖が思い出された。地獄は厳しい世界。自分だけでなく餓鬼たちが、どんな罰を受けるか解らない。
「大丈夫。ちゃんと話はつけてあるんだ」
童子は、少し照れ臭そうに首の後をかいて、幽子に背を向けた。たぶん童子はあの日から、必死に鬼たちを説得していたのだろう。
「できるか？幽子」
こちらを振り返って尋ねる童子に、幽子は目を閉じて、ゆっくりと頷いた。
地獄で歌った初めての歌は、声が掠れ、震えてしまった。餓鬼たちがこの歌を聞いてどう思うのか、どう受け取ってくれるのか。それを考えると幽子は、役目の重さに押しつぶされそうな気持ちになる。
しかし、自分にも出来ることがある。童子がそれを与えてくれたのだ。
自分の役目を精一杯果たしたい。
今、幽子は心からそう思えるのだった。
以来、地獄では時々、風の中に彼女の歌声を聞くことができるのだという。



感謝 なんです！

お礼を言わせてください。

読んでくださった人、そして、八尺くんに　**ありがとー！**

私が鬼太くんに会ったのは小学校の時。そういや、八尺さんとの~~腐れ縁~~…友情も小学校以来ではないでーすか！長いねえ♪

この灯を喰う鳥は、ずいぶん前に書いたお話です。５年くらい前になるかな。そのお話を覚えていてくれて、本にしよう！（どーん！）と言ってくれた八尺さん。ありがとう！少々の修正を加え、こんな形になりました。いやはや、昔書いた物を読むというのは、どうして全く、はっはっは（笑っとけ！）

三作目放映当時ぴっかぴかのヒーローだった鬼太郎くんですが、時が経ち、私の中ではこんなボケ、いえいえ、おっとりした主人公に変わってしまいました。彼は結構ああ見えて厳しい子です。でも、皆で幸せになれるといいなって思ってます。そのためにはちょっと我侭だったりもします。鬼太郎の強さは大らかなところだと思うし、言葉は発しなくてもどっしり傍にいてくれる安心感です。だけどさあ、あんまりボンヤリだから、気をつけてないと主人公のくせに台詞が少なくなるったら！

お〜い。起きろ〜！！寝てるなー！

灯を喰う鳥では、熱い男、えん魔くんの手助けを得て、なんとか一本の話として書くことができました。ふー。えん魔くんに感謝！

灯を喰う鳥が、さんざん書き直しを繰り返してこの形になったのに対し、風の歌声は（私にしては）素直にできたお話です。童子くんは鬼太郎に比べて大変ストレートな子なので、書きやすかったみたいです。そしてここでも天然なおボケっぷりを発揮してくれる少女が一人…。ゆ・う・こちゃーん。八尺さんが美人に描いてくれたので、私、大感激です。これまたこれまた感謝感謝！

八尺くんには、本当にお世話になりました。こんなお話ですが、全ては八尺くんに贈ります。地元特産の納豆のごとく粘っております腐れ縁ですが、ま、今後も楽しく行きましょー。っつーか、よろしくお願いしまっす。

ちょっと夏バテ気味なんだけど、また、お話書きたい虫がむずむずしてきました。のんびり行こうと思ってます。へっくしょい！むずむず。　では！　　こまき。でしたっ！


ありがとうだ コノヤロー!!
ナメンな チキショオ!!
こまきちゃん、お疲れ様あっ!!
お仕事の忙しい時期に重なって
お互い 大変でしたねえ
「灯を喰う鳥」は
読ませてもらった時から
ずっと挿し絵を描かせて
欲しかったので、今回
叶って、幸せでした
お話書きたい虫?
いいお話を
産卵
したらぜひ
読ませてねー!!
挿し絵なら、いつでもスタンバってマスカラ!
タロウ
サンジ
のし
かものちゃん江
天狗ウソップ
サンジ
鬼太郎
みかん

あとがき

さてさて、あとがきです。編集にも、やっと一筋の光が見えてきた感じ…。今回もいろいろと長かったです。どうしてこう、私は準備というものをしないのかと毎度々思うんだけど…ま、いっか"
鬼太郎くんがたくさん描けて、とても幸せな八尺でした♥ 修羅っているのに描いてて楽しい、というのは、本当、鬼太郎ワールドならではだと思います。こういう機会を与えてくれたこまきちゃんに、重ね重ね、感謝!! そして読んでくれたあなたにも♥

では、またお逢いしましょう♥

八尺 行

おくづけ

2001.8.11

無月夜に逢いましょう

逢魔硝子店

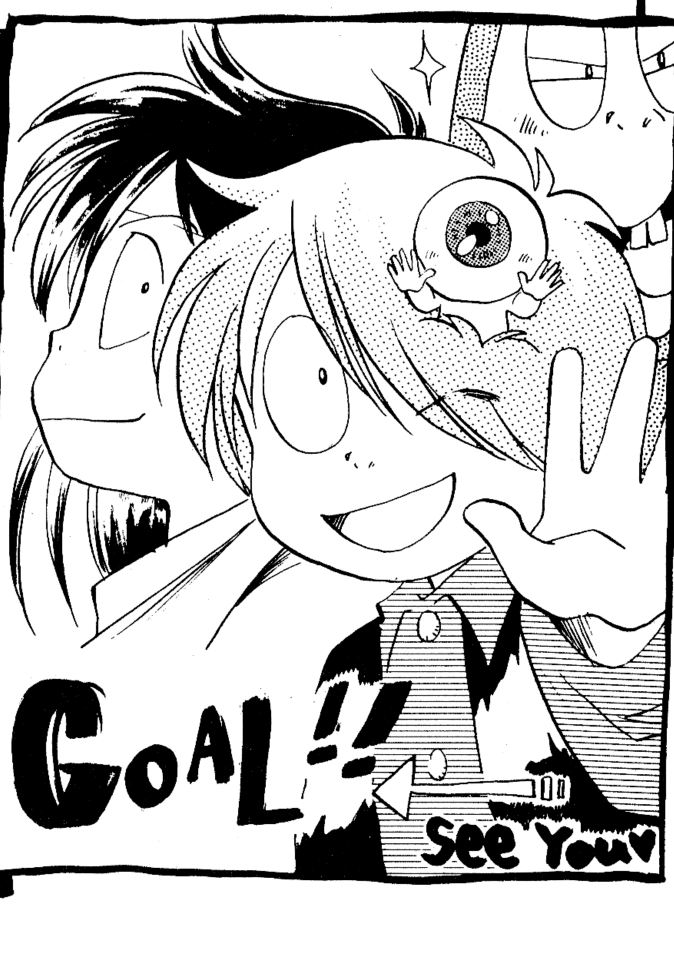
× ×

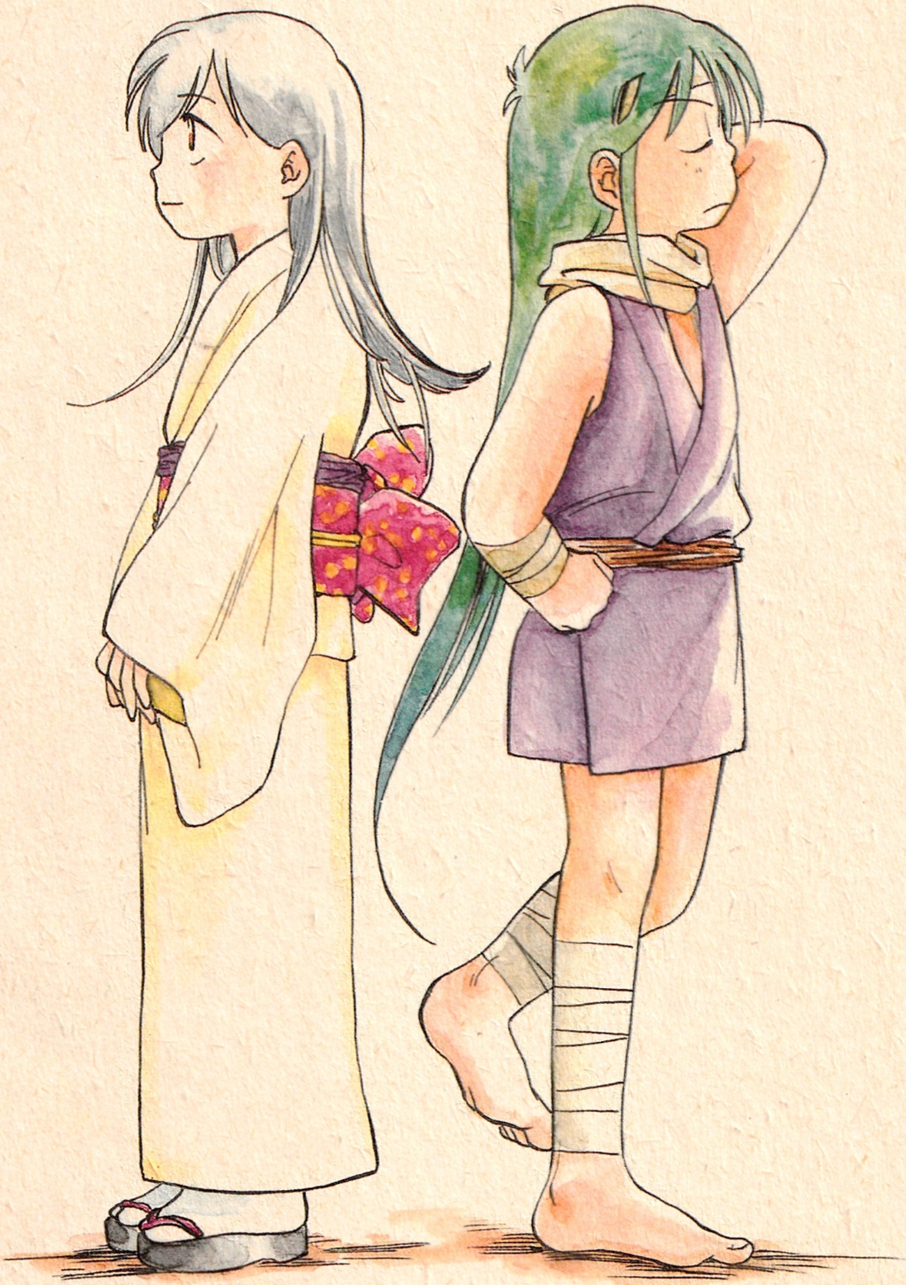
大栄堂印刷サマ♥

× ×

〒310-0818
水戸市東台2-8-15
大谷 友絵（八尺行）

〒310-0012
水戸市城東1-12-14
柴田 夏実（こまき）





2001

逢魔硝子店